
Mile Zero

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mile Zero

【Nコード】

N1357V

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

「あたしを退屈させないこと」そう条件を出した女を乗せてアンティークショップの辛口皮肉屋ルイは車を飛ばす。でも恋の行方は迷走。ジョージアからフロリダ最南端へ、目指すは情熱の太陽とブルーグリーンの海。二十枚以上の写真を添えて。（『Soap Dish』各話とリンクしたこぼれ話『Episode in Arroret Crepuscule』ルイの続編。ですが、これ単体でも読めます。以前、別サイトにて掲載していたものをサイト閉鎖により移植）

1 Atlanta, GA Airport

まだ青く固いプロツコリーを隙間なく際限なく敷き詰め、片隅に腐食しかけた銀のライターを幾つか差し込んだら一丁上がり。

ジョージア州アトランタ、ハーツフィールド・ジャクソン国際空港へと高度を下げていくジェット機。眼下の景色は退屈だった。一面の平坦な森の中、蜃気楼のごとく場違いに浮かび上がるビル群。
> i27840—3613 <

南部の首都がこの程度かと一瞥したきり、ルイはシェードでプロツコリーとライターを締め出した。

代わりに頭を占めるのは一文 It's here. 死んだ両親がやり残した、とあるアンティークの搜索と買い付け。その一品の有無を問うて過去、ネット上で紙上で、何百通のメールを出したことだろう。何百通のSorryを返されたことだろう。

だが、It's here 十文字にも満たない素っ気ない返事は、ここにある、とこの上なく単純明快に伝えている。その言葉はトリガーだった。ルイをして空港へ車を飛ばさせ、キャンセル待ちをさせ、機上の人間とさせた。

返信を寄越した宝飾時計専門店へ、買いたいという申し出はしていない。ただでさえ値が張るシロモノ、懐中時計用の金無垢の鎖。是が非でも入手したいことを知られたら、とんでもない値段を吹っかけられるに決まっている。

一刻も早くたどり着き、何気ない風を装い適正な値段で取引する上限五万ドル。それ以上はどこを探したって搾り出せない、ルイの貯金全て。

着陸は一回跳ねた。直行便は会社更生法下にあるこの会社だけ。座席は狭い、フライト・アテンダントは無愛想、機内上映用イヤフオンは有料と来れば、パイロットの質とて推して知るべし。帰国の便は乗り継ぎがあってもいい、別の航空会社にしようかと決意する。

帰る金が残ってりゃな、と付け足しながら。

「コンコース間の移動に、もう一度荷物をチェックインって何だよ……土地余りまくりやがって、くそ」

こっちは急いでんのに　モノレールの床を蹴る。
ハーツフィールド・ジャクソン国際空港の面積は世界一。全米のどこへでも四時間以内で飛べるといふ利便性から、乗り継ぎ地として世界屈指の多忙を極める空港である。

そうした誇るべき事実の割には古臭い閉鎖的デザイン、滑らかでない床、暗い照明。そもそも航空技術の最先端の象徴たる空港、そのアトリウムに恐竜の骨格があるのが解せない　ルイの苛立ちを緩和する材料は何もなかった。

入国審査の列は英語をろくろく話せない日本人のせいで、散歩中の牛の方がよほど早い。終える頃には、現地の米国東部時間に合わせてやったテイソの懐中時計は午後五時半を知らせていた。

件の宝飾時計専門店の所在はレノックス・スクエア・モール。この高級ショッピングモールは南東部最大級。全米でも有名な高級住宅地バックヘッドに隣接し、その住人も買い物に訪れる。

ハーツフィールド・ジャクソン国際空港からは車でなら四十分程度。地下鉄MARTIAでならダウンタウンを経て、それでももやっぱり四十分程度。

出発前に大急ぎで取得してきた国際免許を噛みながら、ルイは地下鉄がタクシーかレンタカーかと思案する。

「行ったところで、閉店時間になっちまってたら意味ないよな」
メールに添えてあった電話番号は控えてある。かけてみると訛りのないきれいな英語が応対し、安堵しながら耳の緊張を解く。入国審査官の南部訛りを聞き取るのが一苦労だったルイは、これじゃ列を詰まらす日本人と変わらないと苦笑を漏らした。

『当店は六時に閉店致します』

女性の涼やかな宣言にルイの舌打ちが鳴る。間に合わない。電話ブースの味気ないステンレスのベンチを、拳が一つ殴った。

買い付けに訪れた店で銃撃された両親の、目と鼻の先で強盗にさらわれていった金鎖。ルイにはすれ違いの運命が、血を分けた息子にも受け継がれているように思えた。

「そちらでは懐中時計の鎖を扱ってますよね？」

ほんの確認のつもりだった一言が、ルイのその後を大きく揺さぶることになる。

『いいえ、残念ながら』

電話越しの店員の答えと、It's hereというメールの答え 矛盾する二つがルイの中を駆け巡って、唇から呆けた返事を押し出す。

「あると聞いている……」

『失礼ですが、Auroret Crepusculeのルイ様では？ 時計鎖飾り（フオブ）にアレキサンドライトとトパーズ、そしてロシア貴族の家紋をあしらったアンティークのアルバート鎖についてお問い合わせ下さった方ですね』

何たる失態、とルイは齒噛みした。素性も買い付けに来たことも相手に悟られてしまった。格段に返信率が高いという理由から、祖母が経営するアンティークショップの名を出してメールしていたのを今更ながら後悔する。

ルイが自分を呪ってブースの壁をガンガン蹴ると、裏側にいたラテンアメリカ系の男が受話器を握ったまま迷惑そうな顔を覗かせた。こうなりゃいきなり商談だ、と腹をくくってルイは身分を認めたとあるんなら現物を確認したい。そちらに着くのは閉店時間を過ぎると思うが、出来れば

『申し訳ございません』

留守番メッセージを思わせる感情のこもらない軽い謝罪が、する

りと割り込んでくる。

『お探しの品はございますが、非売品です』

「ふ……」

フザけんな、と叫びそうになるのをルイはかろうじてこらえた。

ここにある、返信はそう告げていた。存在するというだけの意味だなんて悪い冗談だ。それは俺の両親が、両親の死後は俺が探し続けてきた、世界にたった一本しかない鎖なのに　ルイは見えない電話の相手を睨みつける。

ルイには鎖を持たずに待ち続けているティソの懐中時計が、ポケットの中で息を詰めているように思えた。

かつては栄華を極めたロシア貴族が所有していた、美術館に展示されても遜色ない懐中時計。それがアンティークに興味のない一青年の、古着のワークパンツのポケットで我慢しているのはひとえに、対となるべき金鎖をルイが探してやれるからだ。

『申し遅れました、わたしはアトランタ支店長のFran。あの鎖は三日後に開店するフロリダ・キーウエスト支店に展示する予定で、すでに輸送途上にあります』

獲物を目前で取り逃がす。そんなサイクル、遺産には真っ平だとルイは内心毒づいた。

ここで流れを翻さなきゃならない　ルイが平静を取り戻そうとするあいだ、受話器の向こうからは客らしき遠いざわめきが聞こえていた。

「分かった、キーウエストで見せてもらう」

『もう一度繰り返し返しますが、お売りする、とは申しておりません』

「買うとも言っていない」

くすりと笑い声が出た。鼻先でなく喉の奥で笑うような衝動的な笑いは、ルイにとって幸先のいい知らせだ。

『ではAuroret Crepusculeのルイ様、オーピングパーティーにご招待致しますよう。三日後の正午、キーウエストにてお待ちしております』

空港内のB区画に居並ぶレンタカー会社。一軒目のハーツで首を振られる。二軒目のエンタープライズ、三軒目のバジェット、四軒目のエイビス……店員の肌色は様々なれど返事はそろって、車はもう残っていない、であった。

「スプリング・ブレイクですからね」

五軒目のアラモの店員は、知らないおまえが悪いと言わんばかりにふんぞり返った。

二学期制をとる大学において、三月は春学期の中間試験と期末試験の谷間にあり、一週間程度のスプリング・ブレイク 春休みを挟む。旅行に繰り出す大学生の需要で、レンタカーは軒並み借り出されていた。

アトランタからキーウエストまでの直行便が満席だったのはそのせいか、とルイはそこで思い当たる。

キャンセル待ちをしてもいいが、三日後のオープニングパーティまで席が空かないなんて事態はシャレにならない。それよりはレンタカーでフロリダへ向かった方が確実だというのがルイの結論だったが、早速にもプランは崩れつつあった。

キーウエストへの陸路は車のみ。レンタカーが無理でもグレイハウンド 長距離バスがある、とレンタカーの店員は告げた。

丸々二十四時間乗り合いバスで過ごす。見知らぬ他人と会話を楽しむ趣味のないルイにとって、ひどく苦痛な選択肢。しかし手は残されていない。

ルイは妥協のため息をつき立ち上がった。

「Excuse me ねえ、さつきから話を聞いちゃってただけど」

「は？」

長距離バスのターミナルへと向かいかけていたルイの足は、娘の

気軽な声に引きとめられた。

見たところルイと同年代、それこそ春休み中の大学生のようだった。東洋系ながら流暢な英語、そこへわずかな南部訛りが混じるところから、アメリカ生活を長く経験したらしかった。

サインした書類をレンタカー店員へ押しやって、娘は椅子の中でルイへと体の向きを変える。

「あたしね、キーウエストへ一緒に旅行するはずだった彼を直前で振ってきちゃったの。せつかくだから一人でも行こうと思つて来たんだけど、ここから運転してくのは正直キツいなって思つてたところ」朝食はシリアルだったの。恋人との別れをそんな程度にあっけらかんと言いのけて、娘はきれいに並んだ白い歯を覗かせた。

アメリカでは歯の矯正と白さがステイタスの一種とされる傾向が強い。メイクなし、無造作に束ねられた髪、破れたジーンズ。それでも完璧な歯とマニキュアを見れば、育ちのいい娘であることは一目瞭然だった。

「だつて知つてる？　ここからキーウエストまで800マイル以上あんの。つまり　運転してくれない？　レンタカー代は持つから」突然の棚ぼた話を、ルイは素早く検討してみた。

「長距離バスとてたどる道程、かかる時間は同じ。見ず知らずの不特定多数に囲まれた後部座席へ押し込められているより、見ず知らずの一人を横に運転していた方がマシかもしれない。」

「直行便のキャンセル待ちリストの長さを見たら、あたしのオフアーを受けるのが賢い選択。大体ね、飛行機で行くなんてキーウエストの魅力の三分の一を放棄するようなもんよ。ブルーグリーンの海を突き抜けるセブンマイルブリッジ、あれをバスの後部座席から眺めるより、運転してみたくない？」

カウンターの向こう側で、レンタカーの店員が大げさに天を仰いで嘆いてみせている。

「彼が受けないならそのオファー、僕が受けたいくらいだよ」

改めて観察してみれば店員の嘆きも頷ける、きれいな顔立ちをした娘だった。茶色の瞳は好奇にすばしこく動き、目尻には芯の強さと生来の明るさをたたえている。

東洋系にありがちな痩せぎすではなく、柔らかなラインも計算して残したような体は恒常的な運動を窺わせた。滑らかな肌は視線を軽やかにさらっていく開放と、だからといって媚びない颯爽が同居している。

きゅつとどこか挑戦的に口角を上げ、娘は人差し指を立てた。

「運転の他に条件はただ一つ　あたしを退屈させないこと」

「The deal is done」

取引成立、その証にルイの右手が差し出される。

「いい答えが聞けて嬉しい」

につこり握手しようとした娘の笑顔が、まるでお手を要求するように上を向いているルイの手のひらに戸惑って曇った。

「キー。車の」

「……呆れた現物主義者」

ノースリーブの肩をすくめてから、娘はレンタカー会社のキーホルダーがついたキーを放って寄越した。

> i27841—3613<

「ルートは？」

ダークグリーンのSUVの運転席で、バックミラーを調整しながらルイが聞く。

「州間高速道路285号（I-285）EastからI-75 South。あ、言っとくけど　スピード違反の罰金は自分で払って」

「俺も余計な出費するつもりはない」

テイソの懐中時計のための金鎖。宝飾時計専門店のアトランタ支

店長に、欲しがっていることを知られてしまった。非売品であるそれを取引に乗せるのにいくらかかるか、ルイは貯金をはたく羽目になる覚悟をする。

そもそもヨーロッパの宝飾店で、強盗殺人犯が奪っていった品だ。どういふ経緯で仕入れたか知らないが、向こうもおおっぴらに取引できるモノじゃない。そこにつけこんでうまく値段を引き下げ

「退屈させないことって言わなかった？」

ルイの思考を不満そうな声が断ち切る。助手席の住人は踵の高いサンダルを脱いで組んだ足をぶらぶらさせ、すでに寛ぎモードに入っていた。

「音楽もなし会話もなしで、黙々と運転してもらいたいわけじゃないの」

「あー……」

I - 285 East、Exit 60。ルイは本線に合流するためにアクセルを踏み込む。スピードメーターの針が示す値は一気に時速75マイルに跳ね上がる。

「その件だけどさ。無理」

「えーっ！」

速度計と連動するかのよう悲鳴が上がった。

「そういう条件で取引したはずでしょ」

「あんたが誰と取引したところで、そいつは無理。I - 75の分岐ってExit 58？ すぐじゃん」

速度の速い左レーンに移ろうとしてインジケーターを出しかけた左手が止まる。

「ごまかさないうで、次の出口で降りて。取引は終わり。契約違反」

「あんな。退屈させないでってのが間違ってる」

降りると指示されたExit 59を無視して、ルイはI - 75とのジャンクションへ向かう。

「あんたを退屈させずにおけるのは、あんたしかいないんだよ」

ルイの握るハンドルはI - 75へと続く分岐道を選択した。

「どんな刺激をやったってそれがあんたの求めるものと違う限り、あんたはいつまでもそうやって誰かに刺激をねだり続けるんだ。で、結局退屈し続ける」

助手席は沈黙している。

「誰かに要求する前に、自分の欲しいモンを考えてみれば？ それともあんたは、そいつは金や服と同じように親や他人から与えられるモンだって思ってるのか。いくつか知らないけど、その歳になつて」

「……取引した相手が悪かったみたいね」

ぼん、とペディキュアを施した素足がダツシュボードに載せられる。ルイはその仕事を彼女の降参の印と受け取った。

「取引前じゃなくて州間インターステート高速道路に乗ってから言い出すのがやらしいとは思うけど、君の意見も君も興味深いから見逃してあげる」

口調は苦笑よりも、楽しそうな響きに占められていた。感知したルイの唇にも笑みが浮かぶ。車は分岐道から本線への合流ゾーンを加速した。

> i 2 7 8 4 2 — 3 6 1 3 <

「最初の分かれ道は無事通過ってわけだ」

「アドバースに従って、自分でラジオつける。でも会話には付き合い合ってもらうから、だって一人じゃできないでしょ」

「はいはい。おっしゃる通りです」

ぱつんと弾けるような音がして、車内を軽快なロックが満たした。

3 Atlanta, GA I-75 Exit 235

> i 2 7 8 4 3 — 3 6 1 3 <

「さあ、I-75に乗った。次は？」

「この道はね、フロリダまでずっと続いているの。今の分岐はI-285で言えばExit 58だけど、I-75で言えばExit 238。それをゼロまで突っ切って」

彼女の腕がまっすぐに前方へ伸ばされるのを、ルイの横目が確認した。

「238だの58だの同一の分岐で数字が違うのが謎だけだな。要するにフロリダに入るまで、この道にいろってことだろ」

「そう。……インターステートの出口の番号がマイル数だって知ってる？」

「知ってたら混乱しない」

ルイは時速85マイルに加速して、一番速い左端のレーンへ移っていく。

「君の受け答えはひねくれてる」

「あんたの質問は馬鹿げてる」

「退屈させない会話をありがとう」

「どういたしまして」

皮肉屋に皮肉を言っても無駄みたいねという呟きを聞き取り、皮肉屋はおかしくなる。

> i 2 7 8 4 4 — 3 6 1 3 <

「インターステートの出口は、州の南端あるいは西端からのマイル数になってんの。I-75のExit 238は、そこがジョージアの南端から238マイルの距離にあることを示してるわけ」

だけど最初に乗ったI-285はアトランタの環状線だから事情が違って、環の南西の端からカウントしている。だからインターステートが交わる場所は同一地点でありながら、それぞれのインター

ステートによって番号が違うのだと説明が続いた。

「分かりづらくないか、それ。俺の国じゃ高速道路の出口は地名だけだな」

「アメリカではね、地名より距離数の方が問題なの。目的地まで何マイルあって何時間かかるか、どこでガスを補給してどこで泊まるか計算しなきゃ。だってホテルもファーストフードもろくにない土地が、延々続いたりするんだから」

> i27845—3613<

次の出口周辺にあるガス、フード、ロジング。店のロゴを並べた青い標識が立っているのを見て、ルイは標識の存在意義を合点する。標識は店を案内しているのではなく、有無を知らせているのだ。「つまりジョージアとフロリダの州境まで、あと238マイル。時速85マイルで三時間ってとこね」

ひとつの州を出るのに、高速道路を三時間ぶっ飛ばさなければならぬ。ルイはこの国の大きさに呆れる。

「アメリカじゃドライブ旅行も一苦労だな」

「そう？ インターステートはどこまで行ってもタダ、かかるのは時間とガス代だけ。気楽なもんでしょ」

「助手席にいるならね」

運転席からの嫌味に、助手席からため息が漏れる。

「君の受け答えはひねくれてる」

「どういたしました」

「褒めてません」

「学習してないみたいだから教えとく。その通りだと真面目に頷かれるのが、皮肉屋には一番つまらない反応だ」

ほんとにひねくれてる、と呟かれてルイは楽しくなる。これはなかなか、からかい甲斐のある相手だと察知して。

「復習させてやるうか？ アメリカのドライブ旅行は気楽なもんだな、助手席にいるならね」

「その通りです ああもう。皮肉屋の鼻を明かしたって、気分な

んか良くななんない。自分が冷たい人間だつて気がするだけ」
「あんたみたいな種族がいるから、世の皮肉屋は機嫌がいいんだよね」

「この話題じゃ分が悪いみたい。話題を変えさせて。Exit23
5、標識にTara Blvdつてあるでしょ」

ルイは話題を譲つてやった。頭上を通過した緑の標識にその文字を読み取つて頷く。

「『風と共に去りぬ』のロケ地、ジョーンズボロに通じる道。タラは実在の土地じゃなくて」

「見たことないんだよね。その映画」

「でもストーリーくらい知ってるでしょ。聖書の次に世界中で読まれているって言われている」

「聖書を読んだことない俺に、そんな比較は無意味なんだけど」
言葉にならない唸り声が助手席から上がる。

「君に声をかけた自分を呪うしかなさそう」

「退屈しない会話をしたかつたんなら、あんたが俺を選んだのは賢い選択だったよ」

「どこまで嫌味なの。まあ、でも」

彼女が荷物からトライデントガムを引っ張り出すと、トロピカルツイストの香りが漂った。

「あそこじゃやたらと切羽詰つてレンタカー会社をウロウロしてた誰かさんのスマイルは、あたしをいい気分にさせてくれるからいいつてことにしとく」

ルイには、とっさに返す言葉を見つけられなかった。マニキュアの指先がガムの包み紙を灰皿に保存するに至つて、ようやく口を開く。

「俺、タバコ吸うから出来ればその灰皿使いたいんだけど」

「……わお。何が起きたの？ どうしていきなり謙虚な態度になっ

てんの？」

「いや、別になってない」

じーっと寄せてくる視線を頬に感じて、ルイは顔を前方に固定する。

「あは。もしかして照れちゃった？」

「どうしてそうなる？」

落ち着かずに無意味な車線変更をし、遅い前の車との車間に苛立つて元の車線に戻る。一連の行動の裏にある動揺を見透かされていないことを願ったルイだが、彼女の鼻唄に失敗を悟った。

「ふうん。皮肉は防衛なのかもね。他人を寄せ付けずにおかせるための、密かなバリア。キーウエストまでの退屈しのに、人間観察も追加」

「よせ」

「禁止する権利なんかないはず。自分の求めている刺激を知れて忠告したのは、他ならぬ君なんだから。あたしは君に興味が湧いたの」
「思い通りになる女ってわけでもなさそうだ。この女とキーウエストまで二人きり。ルイは初めて、オフアーに応じたのは早計だったかと、要らぬ忠告をしたかと後悔する。」

それでも車は一路、南を目指した。マイル・ゼロへ向かって。

4 Maccon, GA I-75 Exit 167

「南下するなら、I-475でメーコンを迂回してからI-75に戻るのが近道なんだけど」

Exit 177、I-475への分岐を示す緑の標識をペディキュアの足先が指す。

「もう七時になるし、ごはんにしない？　メーコンなら店がたくさん。でもその先は選ぶ余地もない田舎が続くから、これを逃すとお腹空かせて運転することになるの。迂回路は使わずにI-75のどつかで降りて、ごはんごはん」

> i27851—3613<

防風林である松、中央分離帯の芝生、灰白色のアスファルトが続く景色にすでに飽きていたルイは、空腹でなくてもこの誘いに乗っただろう。

出口近辺の店を表示した青い標識にはロゴが増え、都市部へ近付いていることを証明していた。

「ハーディーズがいいな。赤地に星のマークがあつたら、そこで降りて」

「いいけど何の店？」

「ハンバーガー」

夕飯にハンバーガーとは　祖母の手料理に慣れ親しんで育ったルイは哀れさえ感じた。

「アメリカじゃ金持ちもハンバーガーなんだな」

「ファーストフードのハンバーガーを馬鹿にするのは、ハーディーズのアンガスビーフを食べてからにしてよね」

結局星のマークは見当たらず、Exit 167、赤いおさげのウエンディーズの駐車場へと乗り入れた。

「ハーディーズは東海岸と南部中心に展開してるはずなのに、ここにはないなんて。もう口がすっかりアンガスビーフだったのに」

フードの青い看板に星を見つげようと夢中だった娘は、すっかり意気消沈していた。サンダルのストラップを留める元気もないらしく、ずるずると突っかけている。

「分かった分かった。次はその何とかビーフに停まってやるから我慢しろ」

「アンガスビーフ」

「あんなあ、ハンバーガーくらいで泣きそうな顔するか？ おごつてやるって言わせたいのか？」

「アンガスビーフ……きゃっ！」

ルイの手にお尻を叩かれて飛び上がり、弾みでサンダルが脱げ、昼間の熱を保持したアスファルトで奇妙なダンスを踊らされる。彼女の慌てぶりがルイを笑わせた。

「ほんとに次は寄ってやるって。アンガスビーフ？ そこまでこだわられると、俺も食いたくなってきた」

「……笑うといい男だけど、笑う理由がいい男じゃない」

輪をかけてむくれられるのは、ルイにとってはハンバーガー以上のご馳走だ。

娘と並んでレジの前に立ち、メニューを見上げる。

「今回は質より量で行けば？ 肉三枚重ねのトリプルとかさ」

「あんなの、食べる前に顎が外れる」

「ハロー。彼女にクラシックトリプルを一つ」

涼しい顔を作ったルイが顎が外れる三枚重ねを注文すると、尻をひっぱたき返された。

ウエンディーズで彼女が顎を外しそうになりながら肉と格闘しているあいだに、陽が落ちた。満腹から来る眠気にルイのあくびが誘い出される。

「限界来たら途中のレストエリアで仮眠してもいいですか、ご主人

様？ 飛行機の中で寝たけど、俺、時差には弱いんだよね」

「メーコンの都市部を過ぎると周囲は再び松林に埋もれ、インターステートと言えど路側灯ひとつ設置されていないとつぷりとした夜道になった。ルイの認識では、単調な夜道のドライブは教科書以上に睡眠には効果的だ。」

「フォートローダーデルまでたどり着けば、ヒルトン取ってある。真夜中には着くんじゃない」

「軽い衝撃がルイの眠気を霧散させた。」

「なんだって？」

「フロリダに入ったら、I-75から有料道路のフロリダ・ターンパイクを使うの。そこまで300マイル。ターンパイクをフォートローダーデルまで250マイル。占めて550マイル、七時間つととこかな。このペースなら深夜二時に到着予定」

「天国が行き先なら、もれなく到着すんだろ」

「食事休憩を挟むとはいえ、十時間近くをぶっ通しで運転した経験などルイにはなかった。時差による寝不足が加われば間違いなく自殺行為。」

「ターンパイクのサービスプラザって あ、インターステートではレストエリアだけど、ターンパイクではサービスプラザって名前になるの。君の国ではなに？ ふうん、パーキングエリア サービスプラザっていいの、スターバックスが入ってるんだから。有料道路ならでは」

「カフェイン注ぎ込んで運転しろって？」

「料金所の職員の制服ってアロハなんだからー。そうそうフォートローダーデルはアメリカのベニスって呼ばれてて、タイガーウツズが運河沿いに別荘を」

「俺の話、聞こえてる？ アンガスビーフを二度と食べられない運命に直行かもしれないんだぜ」

助手席にひたりと沈黙が降りた。

「君、意外と優しいよね」

「はあ？」

沈黙の時間が連れてきたルイの眠気は、再び霧散する。

「だってもっと近くで泊まらせるとか要求するかと思えば、アングスビーフの心配なんかしてくれちゃって」

「泊まるつもりは最初からない、泊まるなんて初耳だし。ただ仮眠くらいさせると」

「……そうやって微妙に論点ずらすのも照れ隠し？」

くすりと喉の奥を鳴らすような笑い声がルイの逃げ場をなくす。

「どうでもいい人間観察なんぞやめて、真面目に考える」

「あたしにとつては、どうでもよくない。そうね、どっかで休もうか。君、夜の運転苦手みたいだもん。スピード落ちてる」

指摘どおり、スピードメーターは制限速度ぴったりの時速75マイルを示していた。

「アルマジロだかアライグマだか、夜行性の轢死体がごろごろしてりや警戒してスピードも落ちる」

なにしろ、フロントガラスにぶつかってくる虫の体液を拭うために度々ワイパーを動かさなければいけない大自然の中だ。ぶつかってくるのが虫だけであることをルイは願わずにいられない。

反して、彼女は明るい笑い声を立てた。

「そんな小動物が飛び出して来たって、過剰反応しなければ事故ったりしないから大丈夫。下手にハンドル切らないで、そのまま轢いちやっつて。でも鹿だったらこっちもマズいかもね」

「おいおいあなた、可愛い顔してさらっと怖いこと言うな」

「へえ。可愛いなんて、こっちこそ初耳」

「怖い顔が怖いこと言ったら冗談にならない」

「冗談なの、さあな、と押し問答が続くうち、ルイの眠気は完全にさめていた。」

「アトランタから帰国するなら、レノックス・スクエア・モールのカリフォルニア・ピザ・キッチンを試して。ピザは絶対イタリアンクラストであるべきだ、なんて言わなくなるって保証する」

夕飯に立ち寄ったメーコンから二時間。チーズを練りこんだピザ生地についてルイが一言こき下ろしただけで、アメリカ風ピザ擁護派の彼女の熱弁が奮われ続けていた。

「アトランタ経由の便にキャンセルが出ればね。で、ハンバーガー、ピザと来て次はなんだ？ 国民食で俺を毒すのが、アメリカ国民の義務かなんかだったっけ」

「そう、次はコーラです。アトランタに本社があるの。これは語ると長いから覚悟しといて あ、バルドスタ。I-75でジョージア州内最後の町つととこね。ここを過ぎたらすぐにフロリダ」

> i 2 7 8 5 3 — 3 6 1 3 <

ヘッドライトが照らした緑の標識が表示するマイル数は、ルイの気付かぬうちに二桁まで減っていた。十の位はすでに一。

「つまりね、アメリカのピザは欧風カレーと一緒。流れ着いた先で独自の発展を遂げてる。発祥の地と違うものになったとしても、それが文化なら否定なんてできないはず。ガラパゴス諸島のフィンチを責める人なんている？ ピザ生地チーズが入ったっていいの」

「まだ続いたのか、ピザ論議」

「じゃあ、そろそろコーラに参りましょうか？」

「伺いましょうか、ご主人様？」

実際のところ、ルイはピザにもコーラにも興味があるわけではなかった。ただ、あたしを退屈させないこと そう要求してきた他力本願な娘が、ルイに眠気を寄せ付けず、旅程の長さを忘れさせるそれがおかしくて、そのままにさせておきたかった。

おかしいんじゃない、微笑ましいってやつだな、とルイ自身も微

笑みながら思った。

「コカコーラ本社のあるアトランタではね、家庭で蛇口をひねればコーラが出るようにするっていう計画があったの」

「アメリカンジョークは分からない」

「本当なんだから！ いずれターンパイクで通過するけど、オーランドのデイズニールワールドでは実施されてる。各店舗で水道みたいにコーラが出てくるように、地下にパイプラインが敷かれてるの。もし家がそんなことになったらあだし、コーラでシャワー浴びちゃうな」

すぐに、車窓をビジターセンターの案内板が通過していった。そして州のマークと共にWelcome to Sunshine State Florida、と歓迎を表す標識がヘッドライトに浮かび上がった。

州境の接近に合わせ、助手席からカウントダウンが始まる。

「……3、2、1……バイジョージア、ハイ、フロリダ！ 住民税のない素敵な州、あだし老後は引越してくるつもり」

「引越す理由が住民税とは、コーラでシャワー浴びたい女にしちや現実的なこと言うね」

「だからあれは現実にあった計画だってば。君にはフロリダに入ってたって感慨はないの？」

両手まで挙げてフロリダ入りを喜んでいた娘としては、ルイの静かな反応がお気に召さないようだった。ぱたんと力なく腕を落とし、唇を尖らせている。

「せっかくゼロになったマイル数が467に激増したら、むしろ滅入るね。南北方向に走るインターステートのマイル数が州の南端からのカウントなら、要するにこいつはキーウエストまでのマイル数だろ」

> i 2 7 8 5 4 — 3 6 1 3 <

「残念でした。I-75の終点はキーウエストじゃなくてマイアミ。このマイル数はマイアミでゼロになる。そこからは国道1号（US-1）をさらに100マイル以上走るの。それも 片側一車線ずつしかない、追い越し禁止区域がたっくさんのね。そのうえ」

思わず呻いたルイに、娘は面白がって追い打ちをかける。

「絶滅が心配されてるキーディアって鹿の生息地域では、制限速度は時速45マイル。US-1はインターステートと同じペースで飛ばせるとは思わないこと」

「絶滅たつて鹿が飛び出してきたら、あんたのおすすめ通り轢くしかないんだろ」

「おすすりめなんて人聞きの悪い。……時速45マイルならよけられるんじゃない？」

ルイは片腕を大きく広げて、大げさに嘆きの仕草をしてみせた。

「75マイルでは轢いて、45マイルではよける？ 俺のボスは無茶ばかり要求する。アンガスビーフを仕留めて来いって命令されないうちに、キーウエストまでたどり着かないとな」

「そういえば……」

呟いてから、助手席は長いこと静かだった。ペディキュアの足先が時折動き、彼女の思考の小さな区切りを教えていた。

会話のないままラジオから流れるカントリーが三曲目になる。ラジオがついていたことさえ忘れていたルイは、これがアトランタ出発以来最長の沈黙かと判断した。

見ず知らずの他人との会話を嫌がって長距離バスをためらっていたはずの自分が、数時間もぶっ通しでしゃべっている 疲労感も伴わずに。

それをルイは、互いの顔を見なくてすむ運転席と助手席だからとした。初対面の相手であることを意識せずに済む。

「次のレストエリアに寄ってくれろ？」

不意の彼女のリクエストが、ルイを思考の海から引き揚げる。

「仰せのままに、ご主人様」

レストエリアは芝生と林の敷地内にピクニックエリア、トイレ、自販機を設置した休憩所だ。

ルイが眠気予防にコーヒーを買っているあいだ、彼女は歩道脇に設置された箱から小冊子を取り出していた。

「新聞？」

「ううん、クーポン」

ぱらぱらとめくられた小冊子には地図や、目立つフォントで値段を明示されたクーポンがぎっしりと印刷されている。

「インターステート沿いにあるモータールに泊まるなら必需品。定価なんてとんでもない、これがあれば宿泊費は三分の二くらいになる。この先の、いくつか選択肢のありそうな都市は　レイクシテイかな」

コーヒーをベンチに置き、タバコに火をつけようとしていたルイの手が止まった。

「泊まる気？　フォートなんとかのヒルトンまで行けって命令は？」

「それはやめた。だってもったいないと思う」

きっぱりとした断言だった。

「アングスビーフで思い出したんだけど……この先はね、牧場地帯なの。馬も牛も。それから見渡す限りのシトラスの果樹園。大農場のすっごい大きなスプリングラーも」

指折り数えながら幸せそうな光が茶色い瞳をよぎることに、ルイは気付いた。

「そうこの見えない夜のあいだに通過しちゃうのは……キーウエストに飛行機で行くのは魅力の三分の一を放棄するようなもんよって言ったあたしが、そういうの見えないフロリダのドライブをさせるのは、自分で納得がいかないの」

続いて、彼女は自信なさに付け足した。

「君が見たいかどうかは、別として」

「あのね」

改めてタバコに火がつけられ、ルイの唇は煙を一つ吐く。

「俺、観光じゃなくてビジネスで来てんだよね。三日後の正午には確実にキーウエストに着かないとヤバいことになるんだよ」

「余裕でたどり着けるはず。……ねえ、見せてあげたいの、単純に君はあれこれ馬鹿にするけど、アメリカはいいところなんだから」

真摯な瞳に見上げられ、ルイは思わず目を逸らす。ルイにとって視線を合わせるの、心を覗かれるのと同義だった。覗くつもりもなかった。

「三日後にキーウエストに着けるなら、この旅はあんた次第。俺は運転手だからね」

イエスでもノーでもない曖昧な返事を彼女がどう受け止めたか。タバコとコーヒーの紙コップを手に、彼女を背にして車へと歩き出したルイに確認する術はなかった。

「あたしのわがままで泊まるんだから、あたしが払う」

Exit 427でインターステートを降り、ホリデイ・インにチェックインする。

「ラッキー、クーポン使える部屋がまだ残ってるって」

満面の笑みで娘がカウンターに滑らせたカードはプラチナ色だった。

「あなた、金持ちのくせに儉約家だね」

「金持ちっていうのはお金がある人じゃない。お金を増やせる人のことよ。そのためにはまず、払わなくていいコストは払わないこと。元手がなきゃお金は増やせないもん」

娘はサインだけボールペンの試し書きだけ判別できないものをレシートに書き付けた。

「三階だって、あたしたちの部屋」

キャスターバッグをエスカレーターに引っ張り込みながら娘が告げた言葉に、ルイの指先はボタンを押すのを忘れる。

「あなた、資産管理より危機管理をどうにかすべきだろ。空港で見知らぬ男を運転手に拾ったり、そいつと同じ部屋に泊まったり。俺があんたをレイプして強盗して車で逃げるとか考えないのか」

ひよいと娘の両眉が上がり、初めて気付いたような表情になった。「少なくとも強盗はないでしょ」

強盗によって両親を亡くしたルイにとって、それは絶対にするつもりのないことだ。

「……どうして分かる？」

確信的に言い切った娘から目を逸らし、ルイはようやくエレベーターに階数を指示する。

「金持ちかどうかを見分けるのは得意なんだから。販売員とかそういうことを経験すればね。君のポケットからたまに覗くゴリアテの

材質が金だつてことくらい、すぐに」

ゴリアテ 旧約聖書に登場する巨人。直径が六十ミリを超えるような大型の懐中時計はそう呼ばれ、ポケットにあれば布地の上から隙間から、その存在を主張する。

「君の腕は時計焼けしてないもん。腕時計しないで金の懐中時計を持ち歩いてる人が強盗するなんて、考えにくいでしょ」

思わぬ観察眼に驚いて身を引くルイは、娘に面白そうに眺め回される。

「それに時差ボケと運転疲れで、あたしを襲う元気なんて残ってなさそうだしね」

娘の宣言通りになるのがしゃくで、ならば襲うふりでもしてやるうかと考えたルイだった。が、シャワーを浴びているあいだからルイ自身が猛烈な睡魔に襲われ、翌朝に揺り起こされるまで眠りに沈んでいた。

「あたしがその高そうな懐中時計を強盗して逃げる可能性を、君も考えとくべき」

「おい……なんだそのはじけた格好は」

眠い目をこする必要もなく、ルイの眠気は一瞬にして去った。

ぴつたりとしたキャミソールはバストからくびれた腰のライン、へそまでを露わにし、丈の短いパンツからは細すぎない脚がすらりと伸びて、すでにビーチサンダルが履かれている。

「ここはフロリダだもん。まだ北の方だから朝は涼しいけど、昼間は暑くなる。昨日の君みたいな長袖にジーンズなんて、この先には生息してない」

「冬でもTシャツ短パンで歩き回るアメリカ人に、服装をどうこう言われたかないね」

モーターにはコンチネンタル・ブレッククファーストがついていた。ビュッフェスタイルの中から娘はシリアルを選び、ざばざば豪快に

牛乳を注いでいる。

ルイに朝食をとる習慣はなかった。テーブルのルイ側はコーヒーだけ、反対側はオレンジジュース、シリアル、ジャムたっぷりワッフル、マフィン、丸々一個のりんごまで置いてある。

「……朝からそんなに食うと、アンガスビーフが入らなくなるぞ」「だって君といるとしやべりっぱなしなんだもん、すっごくお腹空くんだから」

それもそうだ、運転は運動じゃないくせに昨日はやたらと腹が減ったのはそのせいかな　ルイは娘からワッフルを奪って食らいついた。

「あれなんだ？　木に引つかかっている雑巾みたいなもの」

チエックアウトすると再びE-75に乗り、南へとアクセルを踏み込む。

ルイは防風林から松が減り始めたことに気付いた。そして時折、緑灰色の物体が枝から垂れ下がっていることにも。

> i27873—3613<

「雑巾だなんて！　あれはスパニッシュモス。モスって言っても苔じゃないけどね」

「ヤドリギ？」

「エアプランツかな。スパニッシュモスとオークは南部の象徴。あれを見ると、ああ南部だなあって思うの。スパニッシュモスが茂った、大人三人でも抱えられないような太さのライブオークの並木は壮観。時間があればプランテーションに連れてくのに　あつ牧場、牧場」

そんなにじたばたしなくても見えてる、とルイは笑いをこらえながら内心で娘をからかった。

緩やかな曲線を描く緑の牧場に、真っ白な柵が映えている。牛も馬もゆつたりと草を食み、あるいは南部の象徴たるスパニッシュモ

スが下がった木陰で休み、あるいは朝陽を受けて静かに佇んでいる。普段のルイなら牧場など、一瞥くれておしまい。だが防風林ばかり見せられた後では、次から次へと車窓に現れる牧場は新鮮だった。中には小さな湖をたたえた牧場もあり、ルイは唇を曲げる。

「一部の人間よりいい生活してんな」

「でも牛はテレビを見られないし、ピザも食べられない」

「コーラは世界一の飲み物だって未開人に勧めるアメリカ人的発想だな」

「じゃあ訂正。一部の人間よりいい生活してる牛もいるけど、あたしたちはそれを食べる立場にある」

ははは、とルイは声に出して笑った。

「そいつは気分のいい考え方だ」

やがて景色は畑に変わり、高層ビル用のクレーンを横倒しにしたような巨大な施設が現れる。

「おい、まさかあれがスプリンクラーか」

「そのまさか。片端が固定されてるタイプのスプリンクラーの畑を航空写真で見ると面白いの、大地がおつきな水玉模様で」

「ミステリーサークルは人間が作ってるんだって気がしてきたな」
インターステートの脇に細い水路が並走し始め、防風林が途切れ
ては湿地帯の広がる回数が増える。

「ワニがいそうだな……。おっと今、轢死体に亀がいたぞ？ スーパーマリオを車でやるのか、俺たちは」

「ワニ食べてみたい？ 鶏肉みたいなもんよ、スパイシーなフライにするのがおすすめ」

「轢死体の直後で食いもの話するか？」

果樹園が来ると景色は濃い緑になり、枝葉のあいだで太陽を照り返す黄色い果実と鮮やかなコントラストを作る。

「あのさー、グレープフルーツってうまいか？ 俺の国じゃアメリカからの輸入がほとんどだけどさ、すっぱいし、皮は分厚くて食にくいし」

「それは輸出用に早いうちに摘んじやつて、追熟させてるから。ええっ、砂糖をかける人もいるの？ そんなの考えられない！ 信じられない！」

首も腕も振って、娘は信じられない、を三回繰り返した。

「フロリダ・ターンパイクで通るインディアンリバーはシトラスで有名なの。サービсплаザで出張販売してるはず、一袋買う。絶対に食べてもらう。そしてらもう二度と、グレープフルーツがすっぱいなんて言わせやしないから」

「噂をすれば、フロリダ・ターンパイクの分岐がおいでなすった」

Exit 328でI-75を外れる。マイル数を示す出口の数字からすれば泊まったモーターからちょうど100マイル、一時間半のドライブだとルイは計算した。そんなに走ったっけ、とルイは自分の計算結果に首をひねる。

「インディアンリバーじゃなくても、サービсплаザがあったら寄ってね。スターバックス、スターバックス」

ふんふんと軽快な娘の鼻唄で、ラジオをつけ忘れていたことに気付いた。ルイの手はスイッチを入れようとしてコンソールに伸びる。ふとその指が止まった。助手席で奏でられている鼻唄は、ルイの知っている曲だ。

「もつたいない……か」

呟いたルイの指はラジオの代わりにクーラーのスイッチをひねる。サンシャインステート、フロリダの陽光がルイの腕を熱くし始めていた。

整備された三車線の有料道路を車は快適に飛ばす。

オーランド周辺はデイズニールドを目指す車で交通量が増えたものの、ようやくそれをやり過ぎてゆったりと車間を取り始めたところだった。空が低く灰色に降りてきて、たちまちフロントガラスに大粒の雨を叩きつけ始める。

「うわあ、君は嵐を呼ぶ男？ あたしこんな場所で雨にあったことなんかないのに」

「雨ってレベルを超えてんな、スコールだな。マジで見えないぞ」
それまでのんびりと片手運転していたルイだったが、タバコを揉み消し、シートに座り直して前方を注視する。まるで奥深い滝に突っ込んでしまったかのように視界は白く制限され、前を行く無灯火の車が急に速度を落とせば追突しかねなかった。

「ワイパー動かさない方が視界がいいってどういことだよ……」
路肩に停める、このままじゃ事故る」

ハザードを出して、ルイは車を路肩に寄せた。走行音が小さくなると、車のボディを打つ雨音の激しさは鼓膜を痺れさせそうなくらいだった。すぐ脇を、徐行とは呼べない速度で車が追い抜いて行く。「こんな雨でも無灯火で突っ走れるアメリカ人の目って、一体どうなってるんだ。夜だって路側灯ないのにガンガンあおってきたし」

「君は都会暮らしなんじゃない？ あたしならこのくらいの雨、運転するけど。そうアンラッキーな顔しないの、アンラッキーは過去になれば笑い話のタネなんだから」

「過去になりやね。今は思いっきり最中」

ルイはハンドルにもたれて、雨に埋もれそうな道路標識に目をすがめた。

「^{キシミー}kissimmee、244マイル。マイアミの南でUS-1に合流するまで、あと三時間 昼にマイアミでアンガスビーフ食え

るんじゃないか？」

「その前に、インディアンリバーのグレイプフルーツ」

「はいはい。で、US-1は速度落ちるったって100マイル強だったろ？ 今夜中にはキーウエスト入りだな」

着いたらまずは例の宝飾時計専門店の下見だ。デュバル・ストリートだと言っていたな、地図を買わなきゃ ルイは止みそうになり豪雨を睨みながらすべきことの順序を考える。

「だめ。今日はキーラーゴに泊まるの。シエラトン予約しちゃってあるもん」

「はあっ？」

あんぐりと口を開けるルイそっちのけで、娘は嬉々として語りだす。

「キーラーゴはキー諸島の東端、マイアミから一時間くらい。キーウエストへの通り道で、ダイビングで有名なところ。君はダイビングライセンス持ってる？」

「ダイビングするつもりはない。泊まる必要はない。ビジネスで来てんだよ、そんなところで悠長に遊んでられない」

「二日後にキーウエストに着けるなら、この旅はあたし次第って言ったじゃない」

娘には譲るつもりがないらしかった。拗ねたように唇を尖らせている。

「そんなこと言ったか？ いつどこでどのように」

「昨日レイクシティに泊まる前に、クーポン取ったレストエリアで君はブラックコーヒーを買って、タバコを吸ってた。ごまかされないんだから」

記憶力の正確さが恨めしく、言い逃れの言葉を拡大解釈されたのが面倒くさく、ルイは苦虫を噛み潰す。

「文書に残してないものは無効だなんて言いだしやしないよね、君

はアメリカ人じゃないんだから」

たたみかけられて返す言葉を挟めない。

「第一今日中に着こうとしたら、夜にセブンマイルブリッジを渡ることになっちゃう。そんなの、キーウエストの魅力の」

「三分の一を放棄してるようなもん　だろ？　だけど俺はそもそもキーウエストの魅力とやらを感じたくて来たわけじゃないんだよね」

「そんなこと言わないで。そりゃ運転手にするつもりだったけど、ほんとに、ほんとにあの橋をドライブするのはアメリカ人にとっても貴重な経験なんだから。旅行者ならそれ以上だと思って、あたしは空港で君を」

だんだん上ずってくる声に、ルイは車の外の豪雨より助手席の雨を心配する必要性を察知した。

「分かった分かった。泊まるって」

「渋々なだめられたくなんかない。君は今朝の景色を楽しんでくれたでしょ。だからあたしはまたちゃんと君を説得できる、はず。言っとくけど、涙を武器にするつもり、なんかない、んだから」

「泣きそうになりながらじゃ、それこそ説得力ないんだけど」

ルイは実際、女という生物の涙に武力も価値も見出す気はなかった。涙さえ落とせば許してもらえる、どうにか乗り切れると踏んで涙を使うような女には虫酸が走ると思っていた。

けれどむしる恥か汚点のように涙になる前の涙さえ払いのけようと必死な助手席の娘には、本当にその気はなさそうだった。

「武器になりえるって知ってんなら利用してみりゃいいじゃん。それで騙される馬鹿な男もいるだろ」

「君は馬鹿じゃない」

「確かに俺は涙に心動かされたりしないけどね　泣くほどの熱心さに裏打ちされてのことだって酌んで騙されてやるなら、そういう馬鹿なら馬鹿の程度は軽い」

目頭を押さえていた娘の指先が緩む。眉根が怪訝そうに寄って、

濡れた瞳がルイを見上げる。ルイはその視線に捕まる前に、小降りになってきた窓の外へと視線を逸らした。

「まあ安直に言えば俺は、あんたの機嫌を取ろうと試みてるわけ」

「……皮肉屋のご機嫌取りは分かんない」

「ご主人様に分かりやすくご機嫌取りするには、どうしたら？」

昼を飛び越して夕方になったかと錯覚させるほどだった曇天は、降り始めと同様の急速さで明るさを取り戻す。

「んーとね」

どうしてくれようかと企むような口調がルイの視線を連れ帰る。

陽の射し込んだ助手席から、娘は前方を眺め渡していた。

何を見ているのか追えば、雨に洗われて光る緑の道路標識

E

X i t 2 4 4、k i s s i m m e。

「K i s s m e。（キスをして）」

「仰せのままに、ご主人様」

運転席のシートベルトが外されると同時に、雨は上がった。

184マイル地点、フォートドラムにあるサービスプラザでは、娘の予言通りインディアンリバーの農産物が出張販売されていた。グレープフルーツ、オレンジ、ピーカン。

雨の後の日差しはより一層強くなってきているようだった。停車するなり試食コーナーにすっ飛んでいった娘と同じく、プラザ内はTシャツに短パン、ビーチサンダルで溢れている。

足元から立ち昇る雨の名残のむっと蒸すような熱気、肌を焦がそうとする情熱さえ感じられる陽光に顔をしかめてから、ルイはキウエストに着いたらすべき最優先事項を書き換えた。短パンにサンダルを買うこと。

ドライバーにこそ必要だと取り上げたサングラスの向こうで、取り上げられた娘が手を振っている。もう片方の手にすでに試食用グレープフルーツをふた切れ持っているのを見つけて、ルイは苦笑した。

「へえ、完熟してるとこんなに皮が薄いのか。……わっ甘い、なんだこれ。すっげー果汁が」

「ね、砂糖かけるなんて信じられないでしょ」

いたく満足気に笑ってから、娘は山積みされた赤いネット入りのグレープフルーツをぽんと叩いた。

「一袋ください」

「おい、それ一ダースはあんだろ……」

「絞っちゃえばすぐなくなる。日焼けしたらビタミンC補給しなくちゃ。君はタバコ吸うんだからなおさら。ねえ、日差しの強い場所でシトラスがなるって、自然のシステムってうまくできてるよね

おつり取っというて」

取っておけと言うには多すぎる金額に、真っ黒に日焼けした店員が戸惑っていた。

「不要なコストは払わない主義じゃなかったのか？」

「彼がここまで売りに来てくれてなければ、君に本場のグレープフルーツを食べさせてあげられなかった。はい、持って」

娘の指先がこともなげに大きなネット袋を示す。

「俺、運転手。荷物持ちにあらず」

「さつきご機嫌取ってくれた優しいあの彼はどこへ行っちゃったんだろ？ 一時間も経ってないのに」

「晴れてる時に傘を差し出すやつはいない」

「君の受け答えは可愛くない」

結局ルイはグレープフルーツのネットを肩に担いだ。

「やっぱりマナティかな。ああでも、亀もいいんだなあ」

助手席の彼女はフロリダのナンバープレートの多彩さについて語りまくっている。特に環境保護のために寄付するともらえる動物の絵柄付きプレートを取得するのは、夢の一つらしかった。

確かにルイの国のナンバープレートの素っ気無さからすればアメリカの、特にフロリダのプレートは絵画のようだ。月の海に尾を掲げる鯨、夕暮れの湿地に佇む水鳥、砂地を這う海亀、愛嬌のあるマナティ。

> i27876—3613<

「ジョージアではゴミを分別しないでいいんだろ？ リサイクルに興味のない州民が環境保護プレートを欲しがるとなんて偽善だ」

「グロースリーのビニール袋が余ったら、ちゃんとリサイクルボックスに入れてるもん」

「それくらいでいばるな。俺の国なんざ燃えるゴミ燃えないゴミどころの騒ぎじゃない、電池や古紙回収の日が決まっててだ、それを逃すと部屋の隅にいつまでもいつまでもそのゴミが」

助手席からは形容しがたい悲鳴が上がった。

「ジョージア万歳」

ふとルイは追い越しをかけようとした車の、紺に白字のプレートに目を留めた。上部にはくつきりとM I C H I G A N。

「ミシガンって、五大湖のミシガンだよな。北はもうカナダじゃなかったか？ フロリダまで来たらそれこそ大陸縦断だろ。めっちゃくちゃ遠いくせに、やたらとミシガンナンバーを見かけるのが謎だ」

「I-75はね、それこそカナダとの国境から始まっているの。ミシガンからインディアナ、ケンタッキー、テネシー、ジョージアを通ってフロリダまで。距離としてはあたしたちの旅程の倍はあるでしょうね、でも……想像してみてください」

白く細い腕が魔法をかけようとするように、ひらりと優雅に舞った。

「一年の半分は雪。ジョージアでは梨も桃も花盛り、でもミシガンはまだ一面の白。そんな時I-75の標識を見上げてこう思う。このインターステートに飛び乗ってただ真っ直ぐ真っ直ぐ南を目指せば、そこにフロリダがある」

ルイもハンドルは左手に任せて、右手で魔法をかけかえす。

「コートからセーターへ、セーターからTシャツへ。一州抜けるごとに一枚脱いで、後部座席に放り投げる。最後には裸の自分もそこへダイブ」

ベビーは神の贈り物です。鼓動は六週、脳波は九週で始まります

フロリダで羽目を外す若者を心配するかのような看板がインターステート脇に繰り返して設置されていたのを思い返したのか、白い腕は元気を失って助手席に戻った。

「……さっきのは軽率だって言いたいのか？」

声に含まれる熱は急に冷え込んでいた。ルイは戸惑った一拍後に、雨をやり過ごしていた車の中でキスを乞われたことを思い出した。

「別にあれは、そういうんじゃないだろ。単に地名に引っ掛けただけの冗」

「あたしは浮かれた観光客とは違う」

「おかしな深読みすんなよ、あんたが軽率だなんて言っていないだろ」

「……ごめんなさい」

小さな謝罪がなぜこうも自分を苛立たせるのか分からずに、ルイはハンドルを強く握った。

湿気を含んだような沈黙が続いても、それをラジオで埋める気にならずにいた。マイルを示す道路標識の数字を黙々と追ううちに、ルイの苛立ちは募っていく。

何かしゃべってくれ、謝罪以外の言葉を。そう頼みたくても他力本願を戒めた張本人が言えるはずもない。

乗り合いを嫌う男が、長距離バスより乗客が少ないというだけで選択した女。旅行直前に恋人を振ってきた女が、彼の代わりに運転させているだけの男。

キーウエストに着けばすべておしまい。手を振り、See youでなくByeで別れてきれいさっぱり。

暗黙のうちに成立したと思っていた線引き、それを超えて踏み込んで来られるのは想像する気も起きない。

けれど助手席の彼女はそうではないらしい。

ルイには金鎖とその奥の両親の背中が、フロリダの景色を透かして常に見えていた。

アトランタの国際空港から変わらぬルイと、フロリダで一枚薄着になった彼女の温度差。意図せず明らかになった差を、彼女へ突きつけることになった苛立ち。

どうして俺が悪いことをした気分にならなきゃいけない？ 旅先限りの関係と割り切って適当にあしらえばいい、おいしいとこだけ頂いて帰国してしまえばいい話なのに

「あつうつ。もうだめ」

突然の発言に、レンタカーのSUVは驚いてフラついた。

「ハーデイズ許して、あたしはバーガーキングに浮気します。次のウェストパームのサービスプラザに寄って」

「あー……昼飯か。なんだよ、人がせつかく」

「アングスビーフ気分になってたのに？　今回は縁がないみたいね、君の国で探してみて」

アトランタ経由で帰るならアトランタのどこそこで試してみても、とは言わなくなった。ルイが望む方向へと線引きは修正されたらしかった。

ルイは安堵しなければならぬ場面で拍子抜けを感じている自分に気付いて、馬鹿げていると一蹴を試みた。

94マイル地点、ウエストパームのサービスプラザでランチを済ませます。

「マイルが二桁に減った。ここまで来るともう東の海岸線に沿ってきているの。あと一時間でマイアミを通過して、それからは忍耐のUS-1」

「忍耐の」

「そう。あたしが思うにあの区間は、セブンマイルブリッジに向けた爽快増幅装置。フロリダ政府の意地悪で粹な計らい」

プラザの壁に掲示された地図上をルイの指が上下へなぞる。

> i27880—3613<

「この赤い線はI-95だろ？ 並走してんのにターンパイクを選ぶ理由は？」

「あたしが正しい選択をしているか確かめたかったら、I-95でマイアミの大渋滞に巻き込まれてみる？」

「いいえ、ご主人様」

軽い昼食のあいだに駐車場の車は熱気の箱と化し、ハンドルは熱くて握れない。窓越しでさえ日差しは乱暴なほど強く、長袖をまくったルイの腕がちりちり痛む。

隣にいる涼やかなリゾートウェアで肌を晒す娘が正しい服装を選択しているのを、ルイは身をもって確かめさせられていた。

14ドル弱、1ドル、1ドル、1ドル　マイアミ近辺では頻繁に料金所が行く手を塞ぎ、細切れに料金を徴収していく。

エアコンとラジオがあるだけマシなぐらいの最低装備しか持たないレンタカーのウィンドウは手動で、料金所をくぐる度にルイの左手は忙しく動き回らされた。

「ハンドパワー・ウィンドウ！ 君の左腕、明日には太くなってる」

「I-95の渋滞を回避するためには正しい、快適な選択だな。窓

を開けなくていい助手席にいるならね」

「あたしは逞しい腕、大好き」

タバコを灰皿に押し潰し、くそつと呷く態度とは逆にルイは笑っていた。

マイアミの都市部を迂回してやり過ごしたターンパイクは、壁をベージュともピンクともつかぬ色で統一された郊外の新興住宅地を見渡しながらマイル数のカウントダウンを始める。そして300マイルの果てにUS-1へ合流した。

「ガスは充分ある？ この先、キー諸島を進むほどに値段が高くなっていくの。店のない地域の方が圧倒的に長いから気をつけてね。

炎天下でガス欠したら干からびちゃう」

「その時は後続車へ女の武器を発動しろ」

「後続車が男性同性愛者だったら？」

「俺が行くか。……なに驚いてんだよ、俺はゲイじゃない。けどあなたの口癖は、一度試してみたら反対意見は二度と言わせないじゃなかったっけ」

ウェンディーズ、テキサコを最後に不意に商業地帯が途切れた。がらんとした視界が開ける。空、防風林の低い灌木、その隙間から垣間見える草混じりの湿地帯、電線、以上。

道路は片側一車線ずつに絞られ、中央にはべったりと切れ目のない黄色いラインが引かれている。その意味を明示する二等辺三角形の標識が車窓を通り過ぎた NO PASSING ZONE、追い越し禁止区域。

> i27881—3613<

それでも追い越しをかけようとする車が多いのだろう。ご丁寧に、この区域で今年何人が致命的な事故に遭ったかが大きく掲示されている。

それまでI-75とフロリダ・ターンパイクを時速85マイルで

飛ばしてきたルイにとって、時速70マイルに低下しトラックで視界を阻まれる事態は苦痛そのものだ。

ルイの手の甲がハンドルを叩いた。

「忍耐のUS-1、か。ちっ、このまま延々と追い越し禁止なんて腹の立つ話」

PATIENCE。

緑地に白でくつきりと書かれた標識が現れた。運転しながら読み取れるように、単語ごとに間隔をもって設置されている。

> i27882—3613<

「PATIENCE PAYS ONLY 3 MINUTES TO PASSING ZONE」

「追い越しゾーンまでたった三分。我慢、我慢」

助手席からのわざとらしくいかめしい声に、ルイは歯ぎしりした。

「やられた。フロリダ政府もあんたも、先手を取りやがって！」

「あはは！ この道って最高」

サンダルをばたばた打ち鳴らして笑う娘にルイはただ降参するしかなかった。

「ご主人様の退屈しのぎになったようで、光栄にございます」

「うむ、君はいい運転手のようね」

防風と防潮と防砂を兼ねた灌木の向こうの湿地帯は、草よりも水面の面積が増加し始める。

前触れもなく助手席から伸びた手が、ルイのサングラスを強引に回収した。強烈な日差しが眩しいのかと思えば、娘はそれを後部座席に放り込んでしまった。

「わざわざ暗色フィルターかけるなんてもったいない、本当の色を楽しんで」

「空の？ スモッグがないことは分かったから、そいつを返しお」

灌木の隙間をブルーグリーンが埋めた。水平線まで達しても空の青と混じることのない、あまりに鮮やかなエメラルド。

> i 2 7 8 8 3 — 3 6 1 3 <

くすんだ草色の湿地帯を抜けた直後の海は、忍耐への褒美に充分すぎた。

「君の口から感嘆詞が聞けて嬉しい」

「なにをどうしたら、海水があんな色になるんだ」

ルイは我ながら呆けた台詞だと思ったが、車窓へ向ける目も、予期せぬ感動をごまかす気力も奪われていた。

「だってフロリダだもん！」

明るい即答は答えにならない答えだ、とルイの頭のどこかは否定する。けれど耳は、ああそうだなと同意の呟きを聞いていた。

海が遠のいて砂地が伸展し、ちらほらと建つ平屋の住宅やモーテル、マリンスヨップが観光地に入ったことを示していた。水着のまま自転車で行き交う観光客の肌は褐色に焼けている。

娘はうきうきとホテルの看板を探しだした。

「この辺りはもうキーラーゴ。四時……まだ泳げる。ホテルにチェックインしたらビーチに直行！ ビーチフロントだから部屋からそのまま」

「俺、水着ない。ビジネスだって何回言わせる」

助手席の悲嘆を無視して、ルイはきよきよと周囲を見回した。「それより長袖にジーンズじゃ暑くてしょうがない、まず服を買う店を探さない」と

「水着も買いなさい」

「ビジネス」

「ワーカホリック様、一名ご案内」

娘はビーチを諦めたらしく、ルイの買い物に付き合った。しかし仕返しのように観光地に必ずある地名入りTシャツを熱心に勧め、アロハを選びたがり、水着コーナーに連れ込もうとした。

「君はよっぽど大事な商用で来てるのね」

ホテル内にあるレストランの屋外席。アロハも水着も買わせ損ねた娘は、買い物のおいだにすっかり日の沈んだ暗い海を恨めしげに眺めた。

砂浜のトーチは優しいオレンジ色の明かりでヤシの葉を照らし、波の音が南国特有のゆったりしたりリズムを繰り返している。

「別に……そうとも言い切れない」

ルイはシンプルなTシャツとハーフパンツで、ようやく南国仕様になっていた。ライムを落としたコロナをあおりながらメニューをめくる。

実際に、金鎖そのものを欲しているわけではなかった。それを入力するために時間と労力をかけ、目前にして命を奪われた両親。その遺志を片付けないままでは、ルイは女にも仕事にも本気になれずにいただけだった。

金鎖を手に入れるまで、ルイは人生の歯車を錆び付かせておきたかった。

なのに、車中では隣に、車外では目の前にいる娘が歯車を揺さぶろうとしている。軽率な女と思わないで欲しいと言った娘に対する苛立ちの原因を、ルイはそこへ帰結する。

黙りこんだ自分に物問いたげな視線が注がれているのを感じて、ルイは頑なにメニューを見続けていた。

「ねえ、もしあたしが」

「ご注文はお決まりですか？」

意を決したように切り出した娘の言葉は、ラテンアメリカ系の陽気なウェイターに遮られた。

「あ……うん。コンク貝のフリッターを。それからグルーパーのサンドイッチ」

「それ、俺の注文ね。彼女にはチーズバーガーとダイエットコークで充分だから」

娘の茶色い瞳がまん丸に見開かれる。

「ご不満で？ ああ これは失礼。ピザを忘れてました、ご主人様」

「ちょっと待って、彼の言うこと信じないで！ あのね、いくら何でもキーに来たら名産のコンク貝を食べるくらいはさせて」

「このホテルではコーラでシャワーを浴びることは可能ですか？」

「やめてー！」

昼間のあいだは鳴りを潜めている時差ボケも、暗くなればルイの予想以上の睡眠を要求してきた。仮眠はしても宿泊する気はないと

言った自分の浅はかさに苦笑して、ルイはクイーンベッドの一つに潜り込む。

瞼の裏に浮かぶエメラルドグリーン。無理矢理それを追い払って、意識を暗赤色へと沈めていく。その降下中にバスルームから聞こえていたドライヤーの音が途絶え、小さな足音が近付いてきた。

足音は背を向けているルイのすぐ後ろで止まり、温められたシャンプーの香りが落ちてくる。

「寝ちゃうの？」

もう寝ちゃうの？ もう眠い？ 女のそういう言葉が誘いであることをルイは知っている。答えずに眠ったふりを決め込んだ。

「……地名に引っ掛けた、冗談？」

囁く娘が膝か手を突いたのか、ベッドがわずかに傾く。

「地名に引っ掛けた本気かもしれないのに」

ルイの頬に柔らかく温かいものがさらりと触れた。髪か、と眠りの谷底へ向かいながらルイは思う。

「こんな苦しい退屈しのぎさせられるなんて、思ってたなかった……」
続いて髪よりもしっかりとした柔らかかさ、温かさが触れてくるその正体を、ルイは考えまいとした。

「コーヒーはいいの?」

ビュッフェスタイルの朝食の席で、ルイの手にあるオレンジジュースに娘はきよんとした。

大きく取られた窓の向こうには白い砂。早くも色とりどりのパラソルや水着で彩られている。ブルーグリーンの海は目に痛いほど輝いていた。

> i27886—3613<

「この殺人的太陽光線下で、どう眠くなれと?」

「歓迎すべき皮肉ね」

にっこり笑って、娘はクリームチーズたっぷりのベーグルにかじりつく。

娘が早朝に起き出し、波打ち際を散歩していたのをルイは知っていた。砂に刻まれる一人きりの足跡が波に消されていくのを窓から見下ろして、ひどく冷たい仕打ちをしているような気になった。

「いよいよ今日はセブンマイルブリッジを渡るわけだけど、気分はどう?」

「そいつを渡つたらキーウエストまで何分だ?」

「君は旅行のパートナーには不向き。ビーチフロントのホテルに泊まっておきながらビーチに一步も出ないで、先に進むことばかりなんて」

女と一つの部屋に泊まっておきながら、手も触れないなんて

ルイはそう言われているように思った。さつさとキーウエストに入って、微妙さの入り込んできたこの関係を切ってしまいたいと願います。

「……俺はビジネスで来てるから」

「ああもつ」

ルイの硬い口調を吹き飛ばすつもりなのか、娘はベーグルを持つ

たままの腕を広げ、ぶんぶん髪を揺らした。

「ビジネスなんて単語、聞きたくない。今日これからその単語を口にしたら、運転手を解雇して車から放り出してやるから」

「おい」

「サンスクリーンは支給しない。殺人的炎天下でヒッチハイクしたくなければ、言う通りにしてね」

だんだんと娘のペースに巻き込まれている 主導権を握られるのを好まないルイは、憂えるべき事態を認めて極小のため息をついた。

「君の雨男疑惑は取り下げてあげる。見て、あのグリーン」

ささやかなモーター、洋上を走っている錯覚を起こさせる橋。豪華な別荘地、惜しげない果てないブルーグリーン。砂糖のごとき白砂をたたえた無人島、真っ直ぐ伸びゆくUS-1。

> i 2 7 8 8 7 — 3 6 1 3 <

交互に立ち現れる島と海の多彩さ、圧倒的な開放感。いつしかルイはアクセルを緩めていたことに気付いた。時速70マイルと追い越し禁止区間を苦痛に思っていたルイが、タバコを吸うのも忘れて車窓を追っている。

「そりゃミシガンからだって来るよな」

独り言のつもりが、助手席の住人にすっかり聞こえていたらしい。嬉しそくに身を乗り出してくる気配がした。

「そろそろあたしの主張を認めてくれる？ キーウエストに車で行かないなんて、魅力の三分の一を放棄してるって」

「ミシガンのヤツに教えてやれ、空路で来てレンタカーすりゃいい話だよ」

「ひねくれた答えだけど、この道の素晴らしさを肯定したってことにしとく。あ、マラソン。この先がセブンマイルブリッジです」

じゃーんと効果音つきで、自分のものでもないのに誇らしげに興

奮して腕を広げる娘に、ルイは苦笑を抑えられない。

「楽しそうだな、あんた」

「君だつて楽しんでるはず。セブンマイルブリッジって聞いてアクセル踏んだもん」

「……………」

「黙秘権を認めまーす」

ルイは言い訳を探すのを諦めた。そして車はセブンマイルブリッジへ。

「右側のはなんだ？ 鉄道？」

> i27888—3613<

「昔のね。今は崩壊してるし、一部の橋梁を落としてあるから通行不可。だけど昔ここを鉄道で通った人は、本当に波の上を走り抜けてる気分になれただろうな」

そうだなという相槌をルイはどうか飲み込んだ。娘と気の合うところを見せれば要らぬ期待を抱かせる。

「あんたは人の気持ちを想像すんのが得意みたいだな。ミシガン人とか」

「アンティーク好きはみんなそうなんじゃないの？ どんな人の手を経て、どう大切にされて自分の手までたどり着いたか知ったり想像したりすれば、愛着も増すつてもんでしょ」

その価値を知らない者に、正当な対価を受け取る資格はないんだ。ルイは持論を思い返し、ポケットの上から懐中時計の存在を確かめる。その懐中時計と対であるべき金鎖が、キーウエストではどんな懐中時計に繋がれて展示される予定なのか。

価値にそぐわない展示をされていたら、たつぷり皮肉をくれてやる。そう決めるルイの目の前で、細い指がひらひらと舞った。

引き戻されて助手席を見やれば、怒ったような顔が待ち構えていた。

「アメリカ屈指のドライブルートでビジネスのことなんて考えちゃだめ」

「……いつまで続くんか、このとんでもない橋」

「だから、7マイル。またひねくれた答えだけど、この道の素晴らしさをまた肯定したってことにしとく」

12 Key West , FL Old Town

数え切れない橋と島を繋いでひたすら真っ直ぐに伸びていたはU
S - 1は、キーウエストの入り口でようやくT字路になる。

「右折して、オールドタウンに向かって」

「オールドタウン？」

「島の東側の、空港や大型商業施設のあるこのへんは比較的新しく
開発された地域なの。キーウエスト最大の魅力、カリブ諸国やス
イン情緒いっぱいの観光地区はオールドタウンって呼ばれる西側」

キーウエストはそれまでの島々とは比較にならない繁栄ぶりだっ
た。右手にハーバーや基地、左手にデパートやグロサリーを眺め
ながら路面の荒い狭い道を進み、車はオールドタウンへ入っていく。

US - 1のマイル表示が一桁になった。ルイの、両親の背中を追
う旅はこのマイル・ゼロの地で終わるはずだった。明日、正午に
金鎖を買い取ることができれば。

娘の目的地、オールドタウンのどこかで運転席を明け渡せば運転
手としての旅も、娘との関係も完全終了する。

安堵の中で存在をちらつかせる煮え切らない何かを、ルイは心か
ら締め出そうと努めた。

「次の信号、ウインザー・レーンヘッドアンドドレックファストを右折して。ピンクの家があつた
ら停めてね、そのB & amp ; Bヘッドアンドドレックファストに荷物預けて観光に行くから。君、
どこから回りたい？」

安全ならば、赤信号でも右折していい。アメリカの交通ルールに
従って周囲を確認していたルイだが、その途中で固まった。

「……はっ？」

思わず振り返った助手席ではオールドタウンの地図が広げられて
いる。

「やっぱりヘミングウェイ・ハウスかな。ヘミングウェイは好き？」

あたしは『老人と海』が一番」

「観光なんぞしない、俺はビジ……遊びで来てんじゃない。あんとこの契約はキーウエストまでの運転だけだ、これ以上は付き合えない！」

勘弁してくれと冷たく突き放すも、娘はひょいと肩をすくめただけだった。

「だって君のビジネスは明日の正午、それまでどうせ暇でしょ。部屋取ってあるんだし、ゆっくりすればいい。ところで信号、青だけど」

クラクションを鳴らされて舌打ちするルイは、対面通行と信じたくないような細い道を右折した。

> i 2 7 8 8 9 — 3 6 1 3 <

「アトランタの空港でレンタカー借り損ねたの、覚えてないの？この時期に空き部屋のあるホテルを見つけられるかな。キーウエストはゲイにフレンドリーな町、そういうホテルかどうかを見分ける方法なんて君は知らないでしょ？」

先刻から道路に面したホテルやB & amp ; Bの看板にNO V A C A N C Y 満室の表示ばかりを見せられていた。言い返せない。

「あつた、その家。運転お疲れ様、冷たいものおごる」
観念したルイが車を降りると、太陽は頭上高くで勝ち誇ったように輝いていた。

「冷たいもんって何かと思えば……」
デュバル・ストリートはオールドタウンの目抜き通りだ。レストラン、カフェ、バー、ホテル、土産物屋、シーアトラクションの案内所などが端から端までぎっしりと並ぶ。

徒歩でも充分回れるオールドタウンだが、車社会の住人は徒歩より楽な乗り物のレンタルを選ぶ。手軽な自転車、自転車が苦手ならスクーター、スクーターが苦手ならゴルフカート。

牽引車にバイクを載せて持ち込む者も多く、アメリカンスタイルの野太い排気音を響かせる。

それらが騒がしく行き交うデュバル・ストリートを娘は迷わず南下して、キリンのロゴが掲げられた店にルイを引っ張りこんだ。

> i27890 — 3613 <

BLONDE GIRAFFE 店内のショーケースに詰まっていたのはキーライムパイ。

「キーウエストって言ったらキーライムパイでしょ！ この店のは賞とってるんだから」

店先のベンチで豪快にぱくつきながら娘が言う。アメリカンサイズの一切れの大きさにうんざり食べ始めたルイだったが、ライムの爽やかな酸味と甘味、口当たりのいいメレンゲに気付けば完食していた。

「腹ごなしにサザンモストポイントまで歩こ」

「サザン なんだったって？」

娘は問答無用でさらに南下を始めた。

> i27891 — 3613 <

「アメリカ本土最南端の碑。ここからはマイアミよりキューバの方が近いの。防水加工をした車で海を渡ってきた密入国者もいるくらい」

「嘘だ」

「本当だつてば、彼は二回も同じ方法で密入国しようとしたの」

「蛇口をひねればコーラが出てくる都市計画がにわかに対的現実性を帯びてきたな」

だからそれも本当なんだつてば、と明るく笑う声が青い空に抜けていった。

デュバル・ストリートの本裏、ホワイトヘッド・ストリートに入ると灯台がそびえていた。それを左に見ながら北上すれば右手に、

煉瓦の塀に囲まれたヘミングウェイの家が現れる。

> i 2 7 8 9 2 — 3 6 1 3 <

「キーウエストの狭さからすりゃ、だだっ広い敷地だな。なんかこう、文豪ってのは質素に暮らしてるイメージがあるけどな」

「ハウスツアーに参加して、中見てみたい？」

別に、とルイは通過しかけて、ふと立ち止まった。

「あんたは？」

「あたしはそれより、ヘミングウェイの飼い猫の子孫って言われてる六本指の猫を探したい」

「マジ？ そんなんいるのか。探せ」

六本指の猫を探しながら北上を続けていたルイの目に、黄色いピクアップトラックが映った。キーウエストの白い砂埃にまみれ、フェンダーには錆が浮いている。

> i 2 7 8 9 3 — 3 6 1 3 <

「こういうボロなトラックを運転してみたいもんだな」

ルイのサンダルの先がタイヤを軽く蹴る。娘も興味深そうに首を伸ばして車内を覗いた。

「エアコンなしで、全開の窓に肘を引っ掛けて？」

「当然、窓はハンドパワーだ」

黄色いピクアップの運転席から見るセブンマイルブリッジ。想像してみたとき、助手席が空席でないことに気付いてルイは慌ててそれを振り払った。

陽は傾き始めてもしつこく肌を焼いている。

明日の朝まであと半日。半日後にB & amp ; Bを出たらもう二度と会うつもりのない女。早く時間が過ぎてしまえばいい。昼には金鎖と自由を手に入れて、女の隣からもキーウエストからもこの国からも出て行く。ルイはそのプランを胸に刻む。

「そろそろマロリースクエアがいい時間ね。夕陽を見るの」

娘がルイの袖を引っ張っている。ルイはわざとゆっくり歩いて抗った。

「夕陽？ そんなもん、地球上のどこにいたって毎日見れるだろ」
「キーウエストではサンセットもビッグイベントなの。この広いアメリカで、特にこの東部で海に落ちる夕陽が見られる場所がどれだけ限られてるか、分かる？ 夕陽のためだけに人々が集う場所なんてそうそうある？」

それでもルイには、日没が特別なイベントとは思えなかった。乗り気でないルイを察して、娘はぐっと顔を寄せてくる。

「でもあたしが見て欲しいのは本当はサンセットじゃない。普段は見逃してる自然の雄大さを再確認して人々が言葉を失くす一瞬の、敬意と謙虚に満ちた表情の美しさなの」

多分俺はその表情とやらと今すでに向き合ってる、とルイは思った。

デュバル・ストリートに戻ると、娘の言うサンセット・セレブレーションを目指して、観光客たちの流れは北の海岸へと向かっていた。その潮流に乗りながら、娘の指先が一軒のざわめくバーを指す。

> i27932—3613 <

「スロッピー・ジョーのバー。ヘミングウェイが通ってたって有名な。モヒートを飲んでいなくなっちゃ」

「モヒートって？」

「キューバのカクテル。ホワイトラム、ライム、フレッシュミントの葉、シュガーシロップ、ソーダかな。ヘミングウェイの気分になっちゃおう」

ルイの返事も待たず、娘の体は観光客でこった返す店内にするりと入り込んだ。

出てきたグラスには透明な液体と氷、その中を泳ぐ刻んだ大量のミントの葉が涼感を誘う。口をつければ暑さは爽快に吹き飛ばされていった。

「こいつはいいな。暑い時のアルコールはビールと相場が決まっているかと思ってたが……」

新鮮な驚きを呟くルイのグラスはあつという間に飲み干される。

「モヒートを美味しく飲みたいがために暑い午後を過ごす気になつてくるでしょ。アイテム一つが生活を一転させたりするものよ」

満足気に頷く娘の言葉は、ルイに父の懐中時計の存在を連想させた。

「さてと、サンセットクルーズもいいけど。君は船員の指導のもとに帆船の帆を上げるイベントに喜んで参加するタイプじゃなさそう」
「二日間の人間観察の成果があつてよかったな」

見ず知らずの観光客と一丸となってロープをたぐる自分など、ルイは想像しただけで辟易した。

> i 2 7 9 3 3 — 3 6 1 3 <

「大道芸人のショーにも興味なし？」

「そんな上目遣いで窺うくらいなら、素直に見たいって言ったらどうなんだ」

「付き合ってくれるつもりがあるなら、Shall we go? って素直に言ったらどうなの」

ギターの弾き語り、フルートを伴奏に歌う犬、パントマイム、フアイアーツーチのジャグリング。マロリースクエアではサンセット・セレブレーションを待つ観光客を楽しませる大道芸がここで披露されている。

広場に面した土産物屋やキューバンレストランからカリブの陽気な音楽が流れる中、観光客の輪からは大道芸に捧げられる歓声と拍手が上がる。

> i 2 7 9 3 4 — 3 6 1 3 <

決して狭くはない広場が人に埋め尽くされているのを、ルイは呆れて眺め渡した。

「この中にははるばるミンガンから来ておいて、たかが夕陽を見たがる物好きがいるんだな」

「はるばる海外から来ておいて、そのたかが夕陽を見に来た君はなんなの」

「俺は夕陽を見に来たんじゃない」

広場の東側、木製の栈橋には深緑のパラソルとテーブルを並べたバーがある。幸運にも空席を見つけたルイは覚えたばかりのモヒート注文する。ルイの注文を聞いて娘は嬉しそうにした。

「ねえ、こっちに座ったら？ 君は夕陽に背を向けてる」

「ここで見るべきは夕陽じゃなくて、夕陽を称賛する顔なんだろ？ それならこっち向きが正解だ」

頬杖で顎を固定して正面に陣取るルイを、娘はそれ以上咎めなか

った。

徐々に周囲の空気が暖色に染まりだすと、観光客たちのざわめきが小さくなっていく。夕陽は人々の声のポリウムを絞る働きを持っているらしかった。大道芸人たちも気をきかせて彼らのショーを中断する。

ルイの向かいに座る娘もいつしか静かになった。

タバコに火をつけてから、ルイは周囲を見渡す。かつてはスペイン領。マイアミよりも、アメリカが国交を持たないキューバに近い国際空港を持つ観光地だけあって、人々の肌の色も話す言葉も種々多様。

けれど海に落ちゆく夕陽　そのシンプル極まりない、人間の紛争の歴史からも人種からもかけ離れた情景に人は一様に打たれる。キーウエストまで来てというよりは、キーウエストだからこそサンセット・セレブレーションという文化には価値があるのだ。

自分の肩を通り越して背後を一心に見つめる娘の瞳にそう気付いて、ルイは夕陽を振り返る。

価値を知らない者に、その正当な対価を受け取る資格はないんだ。持論からすれば、俺には夕陽を眺める資格ができた　ルイは体をひねっておくのが面倒になって、娘の隣に移動する。

アクアマリンからルビー色へのグラデーションに浮かぶ雲は下から照らされて光り、キーウエストの海と白砂を天に映したようだった。空と海のあいだを、遠くの帆船やヨットのシルエットがゆっくり滑っていく。

> i 2 7 9 3 5 — 3 6 1 3 <

「ねえ、タバコを消して」

隣から小声がする。ルイはタバコを唇の端にに挟んだまま娘に顔を向ける。白い肌は低い空と同じに温かく染まって、茶色の瞳がとろりとした夕陽の色を含んでいる。

「そっちが風上なんだから、煙たくないだろ？」

「そうじゃなくて……できないでしょ」

何を、とルイが問い返す前に娘が乗り出してきて、答えは唇で教えられた。ルイは答えを与えられている唇からタバコを外して、手探りで灰皿に押し潰した。

「……火傷すんだろ」

キスされたままルイは、娘の髪が焦げたりしなかったか指先で確かめて呟く。

「タバコじゃない方になら、したい」

タバコもモヒートも放棄したルイの手が娘の背中に回った。

「君が 与えられるんじゃないくて、欲しがりに行けって言ったの
B & Bのキングサイズのベッド。仰向けにされたルイは
天井で穏やかに回るシーリングファン、そしてその光景を遮る娘の
白い肩を見上げていた。」

> i27936—3613<

「責任を取れと？ 俺の言葉を人質にするのが得意だな、あんたは
君にとっては明日までの時間潰しだつて分かつてる」

ルイの回答も思考も封じようとするようなキスが降って来る。

「でもそれを君の口から聞きたくない」

B & Bは旅行者が一軒家を部屋ごとにシエアするような
システムで、ホテルほどプライバシーは高くない。

ルイから言質を取ることで大胆な行動に出る勇気を奮い起こして
いる娘が、周囲を気にして動きも声もこらえているのをルイは感じ
取った。

たまらずルイは自己防衛の受動から能動に転じる。

「そんなにしちゃだめ」

「火を起こすには摩擦が要るだろ？ そんなんじゃない」

ルイは言質を取り返す。

「ひねくれてる、けど、その、答えは、好き」

毛先が肩で跳ね回るのに合わせ、声も踊る。娘が防音性の低さを
忘れるのを見届けて、ルイの満足が急上昇していく。

「ルイ」

切羽詰って叫ぶ娘の名を呼び返そうとして、ルイはそれが記憶に
ないことを発見する。

まあいい。どうせ明日、用が済めば会うこともなくなる女の名を
問いただす必要もない ルイは即座に思考を捨て去り、娘が欲し
がるだけ責任を取った。

翌朝、娘がキッチンから部屋に持ち帰ってきた朝食の少なさにルイは気付かぬ振りをした。食欲がない理由を尋ねるのは自分の首を絞めるだけだ、とルイは知っている。

軽すぎる朝食を寡黙に済ませたルイは着替えを選び始めた。いかにキーウエストと言えど、五万ドルのビジネスにTシャツとハーフパンツはいただけない。

「じゃあそういうわけで 退屈でない旅をお楽しみいただけましたか、ご主人様」

荷物のまとめの最終段階に入り、ルイは明るく別れを告げにかかる。対して暗い顔でルイの一挙手一投足を見守っていた娘の唇には力が籠った。

「あたしは退屈しのぎで、君と寝たんじゃないの」

「人間観察の結果？ それはまた光栄なことだ」

「もう少し一緒にいられない？ まだ時間はある」

娘の手が遠慮がちにルイの肘へ添えられた。うつむく頬は緊張に強張っている。

「だって正午を過ぎたら、君は帰国することしか考えなくなる」

その通りだとルイは思った。

「理由を一番よく知ってるのはあんたじゃないのか？ 俺が買おうとしてる金鎖をお持ちの、宝飾時計専門店アトランタ支店長、Fr

ank

娘の唇は長いこと開きかけたまま動かさず、代わりに狼狽した瞳が忙しく泳ぎ回っていた。

「どうして……」

その答えにルイの怒りが湧きだす。否定しろよと怒鳴りたくなる衝動を押さえ込んだ。

「あんだ、夢中でつい言っただろ。名乗ってないはずの俺の名前を、昨日、ここで、ベッドの上で」

そこでようやく思い当たったのか、娘の頬にさっと走る朱。

「何かがおかしいとはずっと思ってた。旅行者を装ってたけどアトランタ市民なのはすぐ分かったし。ゴリアテ、なんて懐中時計のサイズは時計かアンティークに関わる人間じゃなきゃ知るはずもない」

Frankだと気付いてみれば、度々にわたって引つかかった娘の言動も納得がいく。そもそも二泊三日にわたって一度もルイの名やビジネスの詳細を訊ねなかったのが、ルイの素性を知っている証であり、自分の素性を聞き返されたくない理由だったということも。

「It's hereのメールを出してから、ずっと俺を見張ってたのか？ アトランタ空港のレンタカーを買い占めたのか？ 惚れたような芝居までして何を企んでる？」

詰め寄るルイの手は、娘の フランの細い手首をつかむ。フランは逃げようとせず、必死な様相で首を振った。

「芝居なんかじゃない。確かに、彼氏を振ってきたって嘘もついたし名前も黙ってたけど、好きになったのは、それは芝居じゃない」

「そんなのは今どうでもいい」
冷たく言いのけられた娘の瞳が潤みだしても、ルイの怒りはおさまらない。

「俺に涙を使うな。馬鹿になってやる気はさらさらなくなった」

「分かってる」

「さあ、もうお互いバレてるんだ、ビジネスといこうか。まずは現物を確認させてもらう」

「待って、お願いだから待って。……逃げないから、少し手の力を緩めて」

はっとして緩めた指の形が、白い肌にくつきり赤く浮かぶ。ルイは慌てて指を解き引つ込めた。

「悪い……」

ルイが女に対して激昂したことはなかった。それだけのエネルギー

ーをぶつける対象とみなしてこなかった。なのに今そうしてしまっていることに気が付き、くそっと呟く。

フランはうつむき、赤い手首をルイの目から遠ざけるように背へ隠す。

「鎖はデュバル・ストリートの支店の金庫にあるはず。来て、事情は道々話すから」

フランの口調から南部訛りは消えていた。

あたしの父は宝飾時計専門店をアメリカ東部に展開してるの。あたしはアトランタ支店長で、今日オープンするキーウエスト支店長も兼任することになってる。

B & B からデュバル・ストリートに向かう途上で、フランは話した。

朝とはいえずでに日差しは強い。住民用と観光客用と交互に定められた路肩のパーキング、その脇には自転車用のレーンが設置してある。

> i27937—3613<

ルイはフランから顔を背け、バイクレーンのアスファルトで揺れる日差しを睨んでいた。

「あの鎖を手に入れたのは半年前。相手が見せた鑑定書も経歴も怪しいとは思った。調べたら盗品だって判明したけど……通報しなかったの。欲しくなっちゃったから。だからあたしの私物として買った」

緑と茶の中間色をしたゲッコーが、ちよろちよるとせわしない動きで歩道を通り過ぎる。

「でもね、素晴らしいものを独り占めするのはもったいないことだと思う。だから販売ルートには乗せられないけど、あれを非売品として展示することにしたの。美術品としてアンティークとして歴史の証人として、高い価値があるから」

小さく古い図書館前では、開館待ちをする老人が階段に座ってるんぶり文庫本を眺めている。

「ルイからメールが来たのはあたしが、開店準備のためにアトランタとキーウエストを往復してる頃だった。真っ青になった。この人はあたしの持ち物が、キーウエスト支店の展示の目玉にしようとしてる鎖が盗品だと知っていて、父の会社をゆするうとしてるんじゃない」

ないかって」

ルイはそこでようやく、フランがこんな大掛かりな芝居を打った理由を悟った。

「だから俺をおびきだして　どこまで知ってるのか、金が目的なのか、探ろうと考えたわけか」

「そう。ルイがどの飛行機に乗るか調べたり、それに合わせてレンタカー店員を買収したり、空室の残ってるホテルを探して予約したり……お金も手間もたっぷりかかったんだから」

ああそうそう、と不意にフランの声は明るく跳ねた。

「返信メールに書いておいた電話番号は店じゃなくて、あたしの携帯。アトランタ空港でルイが電話をかけてきた時、あたしすぐ近くにいたの。電話ブースを蹴ってる君を見ながら笑わないようにするのは一苦労だった」

機嫌の悪い獣そのものな低さでルイは呻いた。

「ただどすぐに、あたしの杞憂だったって分かった。自分が買った鎖がロシア貴族のものだったのも、どんな時計に繋ぐためにあつらえられたかも知ってた。ルイのポケットの懐中時計がそうだって気付いて、純粹に鎖が欲しくて買いに来たんだなって」

だって数万ドルの値打ちがある時計を鎖もなしに無造作に持ち歩いているなんて、お金に執着して恐喝するような人間のことじゃないでしょとフランは笑う。

ようやくルイは顔を背けるのをやめ、肩の力を抜いた。

「だったら、そう分かった時点で素性を言えよ」

デュバル・ストリートに出る。多くの店がまだ開店していない時間、昼間の混雑が嘘のように静かだった。

「そしたら」

がらんとした通りに反響するのを恐れるように、フランの声は小さくなった。

「そしたら君は、ビジネスの相手としてしかあたしを見なくなる」
「正しいね」

ルイの口調に棘が混じると、フランの瞳は不安そうに揺れた。

「あんたの事情は分かったよ。だけど俺を騙した言い訳にはならないね」

「ごめんなさい」

「あんたの嘘を見抜けずにキーウエストへ焦る俺を眺めるのは、いい退屈しのぎだったんだろ？」

「違う！ あたしは本当に、ルイにドライブを楽しんでもらいたかったから」

ルイの手が中空を払って、フランに言葉を飲み込ませた。

「もうこの話はおしまいだ」

それ以上話せばさらにフランを攻撃する言葉をぶつけるだろうことを、ルイは感じていた。最初は探りを入れていたにしろ、フランが好意でフロリダを楽しませようとしてくれていたのは理解していた。

なのに怒りはそれを曇らせてしまう。ルイは自分で怒りの進行を止めたかった。

「ごめんなさい。ルイのプライドを傷つけた」

「プライド？」

そんなもんだと思ってるのか　なじろうとするのを押さえ込む。プライドでなければ何なのか、明らかにしてはいけないとルイの奥底が警告を鳴らす。

用が済めば二度と会うことのない女。

三時間後のオープニングパーティーを待つ宝飾時計専門店の前に立ち、ルイは自分にそう言い聞かせた。

まだ新しい塗装の匂いが残っている。

開店前の店には誰もいない。フランは慣れた様子で鍵を開け、照

明をつけて、店の一角にある立派な革張りのソファへルイを座らせた。

ベルベットのトレイに載せてフランが奥から運んできた金鎖を前に、ルイは長いこと黙っていた。

金無垢のアルバート鎖。フォブには製作当時のロシアで珍重されたアレキサンドライトとトパーズ、所有者だった貴族の家紋。

ルイの両親が探し続け、ついに買い付けに訪れた店で強奪に遭い、正規の市場から姿を消していたまさにその鎖だった。隅々まできれいに手入れされ、柔らかく澄んだ金色を放っている。

フランは許可したものの、ルイは触れることをためらった。トレイの縁に指先をかけるのが精一杯。

「……俺より先に、手に取って欲しかった人間がいたんだ……」
視線を鎖に釘付けにされたまま、ルイは小さく呟いた。

何があつたか正確には知らずとも、フランはルイに事情があることを察したのだらう。そつと横に座り、ルイの肩を遠慮がちに撫でる。

「この鎖を前にして命を奪われた夫婦がいたんだ」

「そうなの……」

「俺の時間はずっと止まっていた」

フランの腕にゆっくり抱きしめられても、ルイは振りほどこうとしなかった。

「言い値を払うから売ってくれ」

「まだビジネスの話はしないで。……ルイ、話してくれて嬉しいの」
ルイは自分の胸にある細い手首を見下ろす。もう赤い指の跡は残っていないかったが、そこをさすってやる。

「さつきは悪かった。遊ばれたと思ったんじゃないんだ。裏切られた気がして、ついカツとなった」

「ルイの信用を裏切ったの。ごめんなさい」
信用ね、とルイは内心で違和感を繰り返す。

「いくらだ？」

途端にフランは呆れた顔で腕をほどいた。

「せつかち。ビジネスの席でそんなにガツガツしたら、足元見られて丸裸にされる」

「あなたにはもう丸裸にされてるけど？ ベッドで」

ぎゅう、とペディキュアの足先がルイの足を踏む。

「なによ。あたしがつい名前呼んじやった時に正体に気付いたくせに、ルイだってあの後も素知らぬ顔でしてたじゃない」

「良かったんだよ」

足を避難させながらルイが素直に笑うと、フランは意表を突かれたような顔をした。

「……いい時間潰しだった？」

「あなたの受け答えはひねくれたね。で、売るのが売らないのかそろそろ返事が欲しいんだけど」

思案する茶色の瞳がルイを、テーブル上の金鎖を、そしてまたルイを見つめた。

「五万ドル」

「またしても丸裸だ」

「ただし支払いはキャッシュじゃなくて労働力で」

五万ドル。ただし支払いにはキャッシュじゃなくて労働力で。

意味するところを理解するまでに、フランの言葉は三回ほどルイの頭の中をめぐった。

「キーウエスト支店のアンティーク部門に適材が欲しかったの。年俸五万ドルプラス生活費、でも支給するのは生活費だけ」

「俺に 働けてのか？ 一年間、この店で」

イエス、とキーウエストの太陽のごとき明るさで答えるフラン。

ルイは言葉を継げずに口ごもった。

「心配しないで、もちろんビザサポートはする」

「いや、そうじゃなくてだな」

「言い値を払うんだっただでしょ？」

「あなた、何回俺の言葉を人質に取れば気が済むんだ……」

ソファに沈んだルイと対照的に、機嫌のいいフランの鼻唄が流れだす。

「鎖は金庫にしまつとく。オープニングパーティーまでに返事をしてね。さ、出かけるから立って立って」

「出かけるって、どこに」

どつと疲労感に襲われ動けずにいる時計焼けのない腕を、細い腕が引つ張った。

「観光」

「昨日しただろ！」

「一番大事なもの忘れてた。すぐそこだから」

どうして俺が言いなりにさせられてるんだ 嘆きつつも抗う気力はなく、ルイは立ち上がった。

デュバル・ストリートを一本西へ。フランはB&mp・Bを出

た時とは大違いの軽い足取りで、ホワイトヘッド・ストリートを下して行く。その後ろを、B & amp; Bを出た時とは別の理由で重い足取りのルイがついていく。

今朝からの感情の激しすぎる上下動にすっかり消耗し、無事に金鎖に巡り合い、しかも売ってもらえるらしいという感慨も安堵も味がしない。

白い塀の上でちょこんと他人行儀で澄ましている猫が、疲れ切ったルイの行方を見物しているようだった。

> i 2 7 9 3 8 — 3 6 1 3 <

「おまえは六本指か？」

「そんなゲンナリした顔で怖がらせちゃだめですよ。ほら、これいきなりフランは道の途中で立ち止まった。これと言われてルイは近辺を見回すが、目につくのは裁判所のような煉瓦色の建物だけだ。

「これだってば」

きよろきよろするルイの両肩を背後からフランの手がつかんで、目的物の前に押し出す。

ルイは見慣れたものを、けれどそこにあるとは予想もしていなかったものを見つけて棒立ちになる。

「キーウエストに入るとUS-1はノースルーズベルト通りとか、トルーマン・アベニューとかって名前が次々に変わるから分からなくなるでしょ。でも最終的にはこのホワイトヘッド・ストリートに行き着くの」

真っ白な盾のような形をした国道の記号。中央にはきつぱりと1の数字。マイアミの南から右手にメキシコ湾、左手に大西洋を従え、洋上の橋と島々を延々とたどってきたUS-1のシンボル。

その下にはマイルを表示する鮮やかな緑の標識。ジョージアのアトランタ空港を発してから何百枚と通過したのと同じものだが、数字はそれまでのどれとも違っていた。0だ。

道路のマイル数表示は、州の西端か南端からの距離となる。ここ

はフロリダの、そしてアメリカ本土としても最南端の地キーウエスト。まさにこの標識がUS-1のマイル・ゼロ地点なのだ。

「大事なのはここ」

ルイの背後から肩越しに細い腕が伸びて、マニキュアの指先がルイの視線を誘導する。国道を示す盾の形の標識の上にもう一枚、小さな板が掲示されていた。

「アトランタからキーウエストまで800マイル、ルイはマイル数をカウントダウンしてここまで来た。キーウエストは旅の終着点だと思つて、その先をまだ考えられずにいるんじゃない？ でも違うの。マイル数はここからカウントアップしていくの」

緑地に白字で小さな標識が伝えている文字は　　B E G I N。

> i 2 7 9 3 9 — 3 6 1 3 <

「ここは始まりの土地。あたしのオフアアを受けてルイの時計を再始動させるには、ぴつたりの場所だと思っけど？」

キーウエストから始まるUS-1。ルイはB E G I Nの文字に目を細めた。脳裏に蘇る車窓の景色が巻き戻されていく。

ブルーグリーンをバックに浮かび上がる、一部の橋梁を落とされた古い鉄橋。洋上を突き抜けるセブンマイルブリッジ。穏やかなビーチを抱えたキーラーゴ。マイアミ郊外に広がる新興住宅地の、ピンの壁と常緑樹とのコントラスト。

そしてまだ見ぬその先。

「……こいつはどこまで続いているのか、確かめに行くのも悪くないな」

「ハンドパワー・ウィンドウのボロいピックアップトラックで？」

「からかうようなフランの声がする。」

「年俸に車代も足してくれ」

「それは生活費に含まれるんじゃないの。経営者は余計な経費を払わない」

「助手席空いてるけど？ アンガスビールもつける」

「なら話は別。あの中古車なら五千ドルで充分ね。じゃあ、誓いのキスでもする？」

ルイは始まりのキスをする。

The End . . . No , The Beginning

「何してんだ、俺」

左手にはキャスターバッグ、右手には航空券　ダラス経由キーウエスト行き片道。搭乗ゲートを前にしてルイは呻く。

前回の突発的アメリカ行きから二週間が経とうとしていた。

金鎖を持ち帰って両親の墓に詣で、キーウエストで一年間働く旨を祖母に告げて後任のバイトを探し、ビザを取得して身辺整理をする。目の回るような多忙の中で考えることを忘れていた選択肢が、ここでルイの前へ浮かび上がってきた。

キーウエストなんて行かなくていい。

念願の金鎖はここにある。代金の五万ドルは労働力で支払えと言われたが、小切手を送りつけたつてあいつは咎めないに違いない

ルイは記憶の中にしかない娘の顔を思い返す。

東洋系ながら笑顔はアメリカ的に快活で、すばしこい茶色の瞳は心の底を見透かしてきそうな知性と澄明をたたえている。娘はキーウエスト支店オープンングパーティーを待たず帰国しようとするルイに、ためらいもせず金鎖を与えた。

ルイは渡米準備が整ったら戻ってくる、と約束をしたのだが。

あれはキーウエストの太陽に惑わされていただけだ　まだフリスの要る自国で過ごすうち、ルイの中でフロリダでの日々が現実から遠のき始めた。

情熱の太陽、ブルーグリーンの海、砂糖のごとき白砂。世界のどこかに存在する南国は日常にはなり得ず、だからこそパラダイスと呼ばれる理由となる。

フロリダの開放感が許した一夜限りの女。おいしいところだけ頂いてサヨナラ。そう割り切って現実に、住み慣れた国に生きればいいだろ、ルイ　語りかけるもう一人の自分の声には嘲笑が混じっている。

チン。不意にジーンズのポケットで懐中時計が鳴った。ようやく鎖の繋がったそのミニッツリピーターを、ルイは慌てて解除する弾みで落ちるキーの束。

中に一つだけ、ルイが鍵穴を知らないキーが混じっている。一週間前にキーウエストから速達で送られてきた封筒に入っていたのは、使い古された傷だらけのキーとキーウエスト国際空港のパーキングチケットだ。問いたださなくてもルイには何のキーか分かっていた。ボロい、エアコンがなくて窓が手動の、黄色いピックアップトラック。

こんな車でUS-1の先を確かめに行くのも悪くない。そう言ったルイの背を、娘は事もなげに押ししてみせたのだ。

助手席空いてるけど？ アンガスビーフもつける そう誘われた時の娘の嬉しそうな顔が、ルイを搭乗ゲートに向かわせた。

せめて小切手は手渡ししよう。

機内の映画はつまらなかった。隣の巨体アメリカ人の脇腹は席に収まりきらず、肘掛けに乗り上げてルイの座席まで侵入してきた。ダラス空港で短すぎる乗換時間のために猛ダッシュをさせられた。

入国審査では前に並んでいた女の指が乾燥していて指紋リーダーが反応せず、審査官の指示で額の汗を拭い取ってようやく通った。ルイは女の額の汗が残るリーダーを使わされた。荷物が出てこなかった。

「体積に比例した座席数を買わせるべきだな」
疲労困憊でたどりついたキーウエスト国際空港。南国の午後早い、高く眩しい太陽がルイには憎らしかった。

トランク代わりのキャスターバッグはダラスで荷物検査をされ、短い乗換時間のあいだに積み込まれそなたらしい。ダラスからの次の便に乗せて、夕方に届けると言われた。

手荷物で持ち込んだ小さなキャスターバッグだけを引いて、ルイ

は駐車場へ向かう。

埃っぽく風の強い駐車場へ踏み入れる前に目的のものは見つかった。これが会社の敷地ならば社長が停めるような特等の場所に、場違いにボロく黄色いピックアップは止められていた。ルイは手の中で温まっていたキーを試す。

釘の頭の形をしたシンプルなロックは、キーに呼応してゴトンと跳ね上がった。

「あいつ、マジでこの車を支給しやがった」

馬鹿じゃないのか、と鼻先で嘆息しながらルイは思う。金鎖を買いたいと言えば女は応じた。車が欲しいと言えばそれも用意した。住む家をくれと頼めばくれそうな勢いだ。

キヤスターバッグを荷台に放り込み、運転席の硬いシートに座る。ハンドルにはメモの添えられた地図が貼られていた。

> i27948—3613 <

『バヒア・ホンダで待ってる。あたしが皮膚がんになる前に来て』
US-1をキー諸島から本土方面へ37マイル、約五十分。Bahia Honda State Parkが赤くマークされている。

イグニッションを回すと、エンジンは駐車場内に響き渡るような騒音を立てた。

ピックアップの最高速度は、今にも事切れそうに咳き込んだところで60マイル。やすやすと追い越しをかけられる。ルイがSilver Trafficのレーンに甘んじたのは免許取得以来初めてだった。

重いステアリング、つながりにくいクラッチ、切り替えるのにやたらと力の要るコラムシフト、壊れたラジオ。

厄日というのは日付変更線を越えたらもう一日延長されるものなのか、とルイは知りたくもなかった真実にうんざりする。窓を全開

にしても、入ってくるのはアスファルトに巻き上げられた土埃混じりの熱風。

「やっぱり小切手は郵送すりゃ良かった。いや振り込めば良かった」
あつという間に汗だくになって悪態をつくルイ。しかしキーウエストを脱し、US-1がサウスルーズベルト通りからオーバーシーズハイウェイに名を変えると、車内を抜ける風は土色から劇的に変化を遂げる。ブルーグリーンへ。

> i27949—3613<

二週間前に娘を助手席に乗せて通った洋上の橋を、今度は逆に走っている。運転してみたいとただ戯れに憧れたポンコツのハンドルを握り、マイルのカウントアップをしながら。

ルイの中で薄れかけていた現実性が、風と共に急速に色を帯びる。水平線まで呆れるくらい青の続く空には、綿菓子を気まぐれにちぎったような雲。青から緑にかけての中間色を独占する海。sugar-loaf 棒砂糖と地名を与えられるほどに白い砂。スピードダウンせよ、ここは本土じゃないと語るシールをフェンダーに貼ってのんびり走る車。

ルイはピックアップの遅さを忘れる。クラッチがきれいにつながれば、うしと笑う。車道と並行して架けられた釣り橋で糸を引く竿があれば、その先を目で追う。レゲエをハミングする。

緑と白の鮮やかなマイルマーカーが37に近付くとルイは、もっと先でもいいのにと感じている自分に気付いて苦笑した。フロリダ風の時間の緩やかさにすでに合流させられている。

右手に、青を背景にして立つ鉄橋が現れた。かつて娘に教えられた通り、今は使われていないために一部分だけがぼつかりと切り落とされている。

> i27950—3613<

すぐに州立公園を案内する茶色の標識が、あと1000フィートで右折しろと教えてきた。

『料金を左折ね』

3ドルの入園料を払うとメモに従い、細い道に乗り入れる。ルイの目は空も海も離れ、娘を探し始めた。フランという名の、かつての一夜限りの恋人。そして小切手を渡せばビジネスの完結する、金鎖の所有者。

> i27951—3613<

意外に空いている駐車場へ停めた車内。

「さあビジネスといきますか」

視界を埋め尽くそうと企むとんでもないエメラルドグリーンから強引に視線を引き剥がし、ルイは小切手を切った。額面五万ドル、宛先フラン、今日の日付で。

それをポケットに突っ込むと、懐中時計が警告するようにチンと鳴った。

「くそ、Auroret Crepusculeの展示ケースに突っ込んできちまえば良かった。ミニッツリピーター故障中の札くくりつけて」

もう一度チンと抗議を申し立てる懐中時計を黙らせ、ビーチへ降りる階段に向かう。柔らかく沈む砂へと、スニーカーを脱ぎ捨て素足を突っ込みたい衝動を押さえ込んだ。

ビーチは広がった。海はもっと広く、水平線まで遙か穏やかに風呂ぎ、二週間前にセブンマイルブリッジを渡ったばかりのルイでさえ逃れられず息を呑むほど。なのに人はちらほら点在する程度で、波音以外は遠い隣人の話し声など聞こえぬ静けさだった。

たった何ドルかで独占状態の碧玉の海と、五万ドルの金無垢の鎖。ルイは自分のしようとしてしている取引がひどく馬鹿げているように思えてきた。さつさと終わらせなければ、と足を速めてサンタンを塗り込む白人女性の後ろを通過する。

「肌を焼きたがる白人優越主義者ってのは矛盾の塊だな」

フランはすぐ見つかった。鮮やかなパラソルの下、デッキチエアで仰向けにゆったり身体を伸ばしている。オレンジ系のビキニは東洋系の肌に映えたし、インディアンリバーで試食した輝くグレープフルーツを回想させた。濃い色のサングラスが空を見上げている。

実在してたんだな、と安堵とも驚きともつかぬものがルイの胸をよぎった。それを機に湧き出ようとする体温つきの記憶を念入りに払いのけてから、歩を進める。

「フラン」

デッキチエアの脇に立ち、ルイは小切手を挟んだ指を突き出す。

「代金を払いに来た。あんたの 労働力で、つてオファーは無理があると思うんだよね。ここがフロリダじゃなくてアラスカだったら、あんたは小切手を引つつかんでアトランタに舞い戻るよ」

フランのサングラスは沈黙している。ほっそりした腕は差し出された小切手を受け取るうとする気配を見せない。

「あのピックアップは空港に置いとくから、誰かに運転させてくれ。あんた得意だろ、空港でドライバー拾うの」

二週間前、ルイの皮肉に対する舌戦を優位に持ち込むこともあったフランの唇は動かない。

ルイの指先で小切手はしばらくのあいだ、はたはたと虚しく海風になぶられていた。小切手の振出人は事態を察して呻く。

「フラン……まさか、寝てんのか」

「何してんだ俺は、マジで、こんなとこまで来て」

娘の足元に座り、着替える暇のなかつた長袖シャツと暑いジーンズを呪い、それ以上に自分を呪い、ルイは砂を蹴った。背後では規則正しく安らかな寝息が続いている。眼前では涼しげで滑らかな海面が誘いをかけてくる。

> i 2 7 9 5 2 — 3 6 1 3 <

「水着はない。ダラスにある荷物の方だ じゃなくて、ビジネスだ」

舌打ちついでに喉が渴いて、ルイはパラソルの根元に置かれたクーラーボックスを開けてみた。用意のいい娘は氷を詰め、サンドイッチやドリンクのボトルを持ち込んでいたようだ。

懐中時計を確かめれば午後三時。一体何時間、ここで一人で待ってたんか。俺が来るか来ないか、紫外線以上に不安に焼かれてたんだろうか、そんな自意識過剰な考えは気付いた端から苦々しく打ち捨てる。

ふと、氷を見たルイは唇に笑みを浮かべた。

一矢報いずしてどうする　ルイの手は氷をつかむと、無防備にさらされていたフランの腹の上へぶちまけた。

ビーチに悲鳴がこだます。フランは飛び起きて氷を払い落とした。「誰っ？　痴漢、変態っ、ポリス呼ぶから！」

寝ぼけとサングラスで視界が定まらないのか、フランの予想以上に激しい警戒にルイは焦って後じさる。

「はあっ？　フラン、俺だっつて」

「オレオレ詐欺がビーチでも通用すると思っつてんの！」

「ちよつと待て、二週間で俺の顔を忘れたのか？　俺だよ、ルイ」

「……ルイ？」

きれいにマニキュアされた指先が、ひょいとサングラスをずらした。茶色く敏捷な、大きな瞳が縁から覗く。

次の一瞬、ルイは抱きついてくるフランの腕から逃げそこねて砂浜に転んだ。

「あんたはつくづく、俺を押し倒すのが好きなんだな。農耕民族の東洋系かと思っつたら、狩猟民族の家系なのか」

「ルイったら、こんなサプライズなら大歓迎。あたし朝からずっと待っつたの」

別のサプライズを突きつけるつもりだったんだけどな　フランに唇を塞がれて、ルイはそう言うのを諦めた。

「ところでルイ。ビーチで水着のあたしを前にしてシャツにジーンズにスニーカーだなんて、どついう我慢大会させられてるの」

「あんたの質問はねじくれてる」

「二週間前にねじくれトークの個人レッスンを受けちゃったの。どうやらいい成績をつけてもらえそう」

個人指導教官を砂から引っ張り起こして、優秀な生徒はにっこり笑った。

「ねえ、君はビーチにいるの。アメリカ本土で一番美しいと称賛されたこともあるバヒア・ホンダにいるの。水着に着替えて 荷物がダラスにある？ じゃあギフトショップで買って。見立ててあげる」

襟や袖から砂が入り込み、汗にまみれて不快この上ない。シャツをはたき、ルイは嘆息をイエスの代わりにした。

娘はパラソルやデッキチェアを置きっ放しにして、駐車場のゴードのレクサスへ戻る。ナンバープレートに描かれたビーチのデザインの下には、ジョージア州のカウンティ名が記されていた。

「へえ、アトランタから乗ってきたのか。今回はどんな可哀相な男をドライバーにしたんだ」

ビキニの紐が掛かった肩がすくめられる。

「自分で運転した、すんごく長かった。君となら悔しいくらいあったという間だったのに」

「……ラジオ壊れてたんだろ」

「そうなの。今はお気に入り、ライブのねじくれ放送局に周波数ばっちり」

助手席に座ったねじくれ放送局ラジオパーソナリティは、度重なる好意の表明をかわしきれずに黙り込む。

ピックアップとは比較する気も起きないくらい静かにエンジンが回る。レクサスが公園内のギフトショップに向かう短い途上、ルイは頻繁に足を組み替えた。定まらない膝先をぼんと叩き、フランは明るい笑い声を立てる。

「あたしも落ち着かない！ だってあたしが運転席で、君が助手席なんて初めてだもん」

「ああそうか」

違和感の原因が分からずにいたルイは、ついつつかりと間抜けな返事をした。

「キーウエストの大らかな住人たちを、名産の貝にちなんでコンクって呼ぶの。だからキーウエストにはコンク・リパブリック　コンク共和国って愛称がある」

ビーチから料金所前を通過し、公園の反対側へ。空港からピックアップを運転してきた時に見えた鉄橋が間近に現れる。

西にあたる鉄橋側のビーチはピクニックエリアが近いこともあり、家族連れで賑わっていた。

「コンクに『キーウエストにビーチはあるか』って聞いたら、答えはノー。厳密に言えばイエス、けど狭いし至近距離でホテルに見下ろされてるし、岩場も多いしヘンな匂いがするし」

だからコンクたちはビーチを満喫したければこのバヒア・ホンダ州立公園まで来るのだ、とフランは説明しながらレクサスをパーキングロットに停めた。

「あの鉄橋……園内にあるのか」

「そう。この土地はフラグラー東海岸鉄道会社のものだった。鉄橋がハリケーンで破壊されてからフロリダ政府が買い上げたの」

「コンクは鉄道を失ったが、まんまとビーチを手に入れたわけだ」
ギフトシヨップへ向かう足を止めて、フランのすんなりした背中が鉄橋を見上げている。

古い鉄橋とそれを眺められるビーチは、キーウエストの鉄道史を語る証人でもあるらしい。

> i27954—3613<

ぼつかりと途切れた鉄橋の一部、ルイはその先端に立たされている気になった。海を飛び越え向こうへ　フランの待つキーウエストへ行くか、後戻りするか。

「キーウエストまで鉄道を通すって壮大な計画は当時、『フラグラーの愚行』って非難されたんだって。でも橋は架かった。海上列車

は走った。このアンティークの鉄橋を見るたび、フラグラの夢は消えてないって思うの。ハリケーンだってそれは奪えない」

アンティークが運ぶ人と夢の面影を愛しそうに語る娘が、盗品と知りながら購入した金鎖。それをあっさりとルイに譲った心境を思うと決心が萎えそうで、ルイの指先はポケットに忍んだ小切手を確かめる。

海を飛び越えるなんて海上鉄道以上に『ルイの愚行』だ、と内心で呟いた。

「……だからキーウエスト支店には、絶対にアンティーク部門が欲しかった」

「夢を語ったかと思えば、いきなりビジネスのお話ですか」

「君だって好きでしょ？ ビーチを前にしてビジネスだビジネスだっていかつい顔するのは」

まずい。これは完全にキーウエストのペースに呑まれつつある。

フランに話せ、小切手を渡せ、ダラスからの荷物を受け取ったら即座に帰国便に乗れ、愚行を犯すな。

一夜限りの女と一年間やってくなんて無理に決まってる。一夜限りじゃなかった女とだって一年続いたためしなんかないだろ、ルイ。しかもボスになるんだぞ。女の下で働いたことなんか、ベッド以外ではない いや、Auroret Crepusculeの店主はばあちゃんだが、あれは女にカウントしちゃいけない。

理性を叩き起こすことで理性を失いかけていたことを思い知らされながら、ルイは自分に言い聞かせた。スニーカーの靴底で駐車場のアスファルトをざりつと鳴らす。

「やっぱり水着は買わない。ここではつきりさせとく。フラン、俺は」

単にこいつを渡しに来ただけなんだ。そう告げて小切手を渡そうと、ポケットに指を滑らす。懐中時計の金蓋が噛み付くようにルイ

の指先を挟んだ。

「えーっ、海の中ってあつたかくて気分いいんだから。波もないし、メキシコ湾サイズの温水プール」

「俺はただ……」

指に食い込む懐中時計の蓋をどうにか振り払い、指先に小切手を確保する。ごそごそしているルイを怪訝そうにしていたフランが、はっと息を呑んだ。驚愕に見開かれる茶色の瞳を、ルイは気迫でにらみ返す。

「ルイ、まさか」

そうさ、俺はあんたにNoとByeを言いに来たんだ

「まさか泳げないの？」

「ダデイ、ボール投げてー！」

「よーし、しっかり受けるよランニングバック！」

突っ立つルイの横を、楽しげな父子がビーチへと駆け抜けていく。フランがそつと身体を寄せてくる。

「大丈夫、遠浅だから足は届く。ボディボードを浮き輪代わりにしてもいいし」

「マミー、レストルームはどこ？」

「すぐそこよ、もう少し我慢してね」

無言のルイの横を、そわそわした母娘がトイレへと急いでいる。

親子の微笑ましい休日風景は暗い都会を根城にする者にとって、脱力と嫌悪を伴うひどい毒だ。ルイの虚ろな目はフランの日焼けした肌の上をさまよった。

「言ってくれたらいいのに、ルイ。だからずっとビジネスだビジネスだって主張して、ビーチに出ようとしなかったのね。気付かなくてごめんなさい」

「マジでビジネスなんだが……場所を改めさせてくれ。ダラスからの荷物を受け取んなきゃいけないーし」

重すぎる倦怠と疲労を抱えたルイは、回れ右してずるずるとレクサスを目指した。

戻ってチェックインすると言い張るルイに、フランは渋々パラソルとデッキエアの撤収を命じる。シャワーを浴びて、トイレでホルターネックのキャミソールワンピースに着替えてきた。

フランは東洋の血が混じっていることを十分に活用しているようで、アジアンテイストの色柄が肌の色、茶色の瞳や髪によく映える。そのフランがボロいピクアップ百台の金額で釣り合うくらいの高級車に乗り込むと、通りすがりの観光客が称賛の視線を送ってくる。早く乗り込んじまえ、とルイはレクサスのドアを蹴りたい気分になった。

キーウエストへ戻る道すがら二車線の地域にさしかかると、最高速度60マイルのルイは右側の遅いレーンに寄る。バックミラーに映っていたゴールドのレクサスがぎゅーんと加速してきて横に並んだ。

レクサスの助手席の窓が、電動ならではの遠隔操作とスムーズさで下がる。一方、パワーウィンドウどころかエアコンを持たないピクアップはすでに窓全開だ。

手を振るフランの首元に黒く細いコードが垂れている。携帯電話のヘッドセットのようだった。

「夕食は海老、ポーク、チキンどれがいいー？」

ばたばた鳴る風に負けじとフランは声を張り上げてきた。ヘッドセットのマイク部分を押さえたところを見ると、電話中らしい。

「俺は部屋で荷物を待つてなきや」

「だからテイクアウトするー！ グリーン・ストリートにペナンカレーの美味しいタイレストランがあつてね、テイクアウトできるのー！ で、カレーの具は海老、ポーク、チキン？ あ、野菜も選べるってー」

応答から、まさにそのタイレストランに電話している最中だと気付く。

メシなんか一緒に食ったら、ますます小切手を突きつけにくくなる。ルイが断ろうとした矢先、返事待ちに気を取られたか、レクサスがふらつと揺れた。

「海老だ海老！ 危ない運転すんな、車ごとダイブして海老に食われないのか」

「アイアイサー！ じゃあ、モーターでね。フロントから電話する」
レクサスは滑らかに加速してピックアップを追い抜き、US-1が再び一車線ずつに戻る頃には見えなくなった。

悪いがペナンカレーは持ち帰ってくれ。俺はあんたに支払いをしに来ただけなんだ、そう事務的に告げて小切手を切る。予約してあるモーターの看板を探しながら、ルイは頭の中でシミュレーションを繰り返していた。

部屋に入れちゃいけない。フランが来たらロビーまで下りて行って、そこでビジネスを済ます。このピックアップのキーも返す、空港まではシャトルを使えばいい話だ。

決意を整えなおして踏み込んだモーターのロビーには、すでにペナンカレーの香ばしい匂いが充満していた。スパイシーな香りの発信源を抱えたフランがソファから上機嫌に手を振ってくる。

「えらく早いな……」

「だってお腹ぺこぺこだったんだもん。あたし犬を飼うことがあつたらおあずけはさせない、このたった十分間があたしにそう決意させた」

歓迎できない展開だ、とルイは気を引き締めた。会話から親しさを排除せよ、さあビジネスの時間だ。しかしルイの、苦手な機内食を残してきた胃がカレースパイスの刺激に暴れ鳴く。

結局ルイは不本意ながら海老入りペナンカレーを平らげた。

カレー代を払うと言うルイに、フランはきらりと白く輝く歯を覗かせた。

「じゃあ明日のランチをご馳走して。マグノリアカフェのサワードウ・サンドイッチがいいな」

「いやその前に……話があるんだ。仕事のことだ」

「仕事の話なら明日。九時に店に来て。今日はゆっくり休んで、君は時差ボケと食後の睡魔にノックダウン寸前みたい」

「そうだ疲れてんだ。一晩眠って気力を養い、明日はきつぱりとフルランのオフアートを断る。カレー代は小切手に足して返そう。ルイは重たくなってきた瞼を伏せて頷く。目元に添えられたキスを払う。気力ももうない。」

「来てくれて嬉しい、ルイ」

素直な言葉にルイは苛立つ。

「この女は俺が戻って来ない可能性など考えなかったのか。俺が小切手を押し付け、約束を違えて帰国しようと思ってることなど想像もしていないというのか。ゴールドのレクサスを見送って、ルイはくそつと呟いた。」

「彼はレオ。以前アトランタ支店で一緒に働いてたの。今はポストン支店でアンティーク部門を任されてる。前々からキーウエスト支店開店に向けて、商品ラインナップの助言を頼んであったの」

翌朝、開店前の店に到着早々フランに紹介されたのは三十を目前にしたくらい、ソツない笑顔を張り付けた背の高い白人だった。ルイは自身の視界でしか見えないポストイットを相手の額に貼り付ける。書いてあるのは、『覚える必要のない人間』という文字。

「よろしく。まあとにかく僕のファイルを見てくれ。気に入ってもらえると思うよ」

第三者の前であの話は切り出しにくい。早く追っ払うべし、とレオの存在を煙たがるルイはレオ本体以上におざなりにファイルを眺めたが、すぐに眉を寄せた。

「あんだ、こんなんが売れると思ってんのか？ ポストーンでの売れ残りを体よくさばきに来たとしか思えないね」

いきなりの発言に、レオの笑顔が凍りつく。宝石の散りばめられたアンティーク時計の写真を、ルイの指先がぱちんと弾いた。

「ここはキーウエストだ、光りもんなら太陽も海もある。求められるのは素朴さだろ？ 正確性や流行も要らない。日没が何時何分何秒か、マロリースクエアで触れ回りたいなら別だけどな。そんなのバーで飲みながら海を眺めて待つてりゃいいお土地柄さ。ポストンと一緒にすんな」

「いや……だが、アンティークには常に時代も場所も超越した人気を誇る商品が」

「アンソニアの柱時計、ティアドロップか……ガラスがオリジナルじゃないな。ニスの状態も悪いね、それでこの値段じゃ売れ残って当たり前だろ。人気商品だからこそ客の目も肥えてる、あんたはキーウエスト支店を赤字にするアドバイスをしに来たのかな」

痛烈な嫌味にレオは怒りで頬を染め、ルイの手からファイルをつたくった。そして険悪なやり取りを唾然として眺めていたフランに向き直る。

「フラン、君はアトランタと一緒に働いた僕よりも、この失敬な男の言うことを聞く気なのかい」

「でも……ルイはアンティークにとっても詳しいの。キーウエスト支店では彼がアンティークの責任者になるんだから、最終決定は彼に任せるつもり」

「フラン。僕は君の推薦で昇進してポストンへ行った。ポストンでの成果を君に還元しようとしているんだよ？ 忙しくて連絡を取れなかったのは悪いと思ってるけど……」

ルイはレオの左の薬指に指輪がはまっているのを、その左手に頬を触れられ瞬時に硬くなったフランの横顔を見る。そして悟るフランとレオのあいだにあった、上司と部下以上の関係。

「不動産学でこういう言葉がある。ロケーション、ロケーション、ロケーション。出店に際して大事なのは品揃えよりもまず立地なの」

話しながらショーケースを巡回するように歩きだし、フランは自然さを装ってレオの左手から逃れたようだった。さらりと上質なパンツスーツの裾が揺れる。

「マクドナルドが成功をおさめてるのは不動産マーケティングに優れているから、つまりロケーションの優位性を熟知しているから。」

マクドナルドに追隨して出店すれば間違いがないとまで言われている。「ここらにマクドナルドは見当たらないけどな？」

腕組みをしたルイが不機嫌にこぼす。

「ねえレオ、あなたがポストンで仕事でも 私生活でも成功しているのは分かっている。ファイルはもちろん参考にさせてもらう。けれどキーウエスト支店はロケーションに劣る分、品揃えはポストンよりシビアになる。決定はルイに任せる」

レオは唇を曲げ、肩をすくめた。

「この無礼な男の言う通りにして赤字の責任を負うのは君だよ、フ

ラン」

レオが出て行くと、ルイはファイルをゴミ箱に放り込んだ。

「あいつはあんたのトンでもない場所にほくろがあるのを知ってるってわけだ」

「去年。でも、もう終わったこと。彼もあたしもそれぞれの店で多忙だったの」

「違うね。あいつはあんたを利用したんだよ、世間知らずなお嬢さん。アトランタ支店長に取り入ってポストンに栄転するために」

きれいな形に塗られた唇が半開きになる。フランはぼかんとして、それから苦笑した。

「彼はそんな人じゃない」

「ならどうしてポストンから連絡してこなかったんだよ。どうして結婚指輪してんだよ。どうしてこんなクズみたいな商品を押し付けようとしてんだよ。騙された以外の説明をどうこじつけるのか、ご教授願いたいね」

「ルイがそんなに怒らなくてもいいのに」

それもそうだ。金勘定が済んだらもう会うこともない女のことイラつくなんて、エネルギーの無駄だ。やるべきことを片付ける

ルイの手は小切手を挟んだマネークリップへと伸びて、ふと固まる。

ルイとて同じと気付いた。金鎖を手に入れるために利用して、約束を破ってフランから立ち去ろうとしている。

小切手による決済を敢行されてもフランは、ルイはあたしを騙すような人じゃなかったと誰かに笑って言うのだろうか。ルイが腹を立てている『フランの愚行』を繰り返すのだろうかと考えて、ルイの拳はぎゅっと握られた。

「ルイ？」

「なあ、俺なんかやめとけよ」

ついに五万ドルの小切手を娘の鼻先へ突きつける。

「鎖の代金だ。俺がここで働くことはない、そんなの非現実的なんだよ。『フラグラの愚行』は実現した、だが結局ハリケーンで崩壊して鉄橋はオブジェと化した。わざわざ同じ轍を踏むのは、あんなの嫌がる無駄なコストってやつだよ。俺たちにはオブジェさえ残らない」

フランの瞳は、反射的に受け取った小切手を読み取れずにいる。壊れたバーコードリーダーのように表面の数字とアルファベットを繰り返しなぞるだけ。

「人を疑うことも切り捨ててることも覚えろ、いい経営者は人的コストも浪費しない。俺に支払う意思が残ってるうちに、こいつを持って銀行に急ぐんだな」

「昨日の日付……」
「だから俺は決済しに來ただけなんだよ。鎖の代金も、あんとの関係も」

事態を信じられずにまごつく娘にルイは苛立ってきた。金持ちでおおらかなフランを騙そうとする男は、この先いくらでも現れるだろう。

「二週間前の俺は好き放題やって、値切った拳句に鎖を持ち逃げして、あんに何万ドルもの損害を負わすことだって出来たんだ」

「でも君は戻ってきた。だって……それなら遅配されたダラスからの荷物は？ 小切手を渡すためだけに大荷物はいらないでしょ。あんな、一年間働くつもりの人でなきゃ不要な量」

最高に指摘されなくなかった点をピンポイントで爆撃され、ルイは呻いた。その手ごたえがフランを元氣付けてしまったらしく、ブラウンの瞳が瞬き一つで生気を取り戻す。

「ねえ、鎖でルイを縛りつけるつもりはないの。店で働くのが嫌ならオファーは取り消す、好きなこととして好きなだけキーウエストに

いればいい」

モヒートを飲んで、本を読んで、散歩をして、ビーチで寝そべって、懐が寂しくなったら働けばいいの。そうそう、コンクに聞いたらモヒートはE1 Meson de Pepeが最高なんだって、マロリースクエアにあるキューバレストラン。そのシユリンプつたらガリックがとつても効いてて。

そんなことをアングスビーフ並みの熱心さで説くフランに、ルイは心底呆れる。答えをはぐらかすでもない、逃避するでもない、無理に慰留するでもない。ただ純粹にルイの誠意を信じ、キーウエストへの賛辞でもって招待しているようだった。

「週末にはキューバ音楽のライブがあるの、今度一緒に」

「週末ライブはもう先約がある。帰国便の機内アナウンスだ」

叩き切る口調でルイは言葉を遮った。

「レオでも誘えよ。あいつは妻子持ちでも、支店長の誘いなら断らないタイプだぜ」

「まただ、と怒りの蒸気がかすむ脳裏でルイは思う。」

なんて苛立たしい女。なんて腹の立つ女。フランの無邪気さがアレルギーを引き起こすように、ルイは自分を保てなくなる。傷つけると知っていて突き放したくなる。

どうせあんただって離れていくんだろ。数発の銃弾が止めた俺の歯車。ようやく回りだしたそいつがまた喪失に錆付くくらいなら、一時の夢と割り切り切らせてくれ。キーウエストを日常でなく、楽園のままにしといてくれ。

歯車を動かしたあんなだけが恐らく、錆付かせる力を持つてるんだから。ルイは口に出さないまま叫んだ。

店を飛び出したルイは、モーターを経由してコインランドリーにいた。

ダラスから遅れて届いた荷物には手をつけない、封印したまま持ち帰ると決めた。一度荷物を解いてしまえば角砂糖が溶けるように決意も崩れていきそうで、ルイはモーターの部屋の隅へとそれを押し込んだ。

そうなると残された着替えは砂まみれの長袖シャツとジーンズのみ。洗濯室はモーター内にも併設されていたが、屋内にいれば鬱屈した気分がさらに腐りそうで、外のコインランドリーへと向かったのだった。

築年数だけ厚塗りされた白いコンクリートの建物、大きな窓にはまっているのはガラスでなく鉄格子。キーウエストは本土の白人の高級リゾートだが、労働は中南米からの貧困移民層が支えている。彼らにとっては古びた巨大な業務用洗濯機さえ強奪の対象となるのだろう。

洗濯機のクォーター投入口はいい加減ガタが来ているらしく、先一枚がつかえて後が入らない。苛立つルイが硬貨を送るハンドルを力任せにひねればひねるほど、頑なな拒否に遭った。

だが不意に横から割り込んだ節くれ立った指が、小さな動作であっけなく硬貨を機械内部へ落とし込んでみせた。年季の入った褐色の肌をした老婆がにやりと笑えば、欠けた前歯が覗いた。

「……すげーな、ばあちゃん」

「何年、ここで店やってると思ってるんだい」

主のとりなしで機嫌を直した洗濯機がようやく動き始め、ルイは改めて店内を見回す。二十台以上もある機械類はフル稼働に見えるのに、待っている客は他に誰もいない。

窓際の簡素なベンチは毒々しいオレンジ色の樹脂で、腰を下ろせ

ば抗議するようにきしんだ。足を投げ出すと、ルイは光の明暗の境に体を伸ばした格好になった。

鉄格子しか遮るものがない分、裏道に面した大きな窓からはあらゆるものがふんだんに入ってくる。強烈な照り返し、アスファルトを渡って温められた海風、犬を散歩させる住民のゆったりした歩調。裸電球が点いていなくても、洗濯物を畳む老婆の手元は困っていないようだった。注入される水の音、モーターの音、ドラムの中で洗濯物が位置を変える音。騒がしいのにそれらの単調な繰り返し、ルイには懐かしい静けさのように思えた。

洗濯待ちという最高に持て余すはずの時間は、老婆がのんびりとし、しかし確実に重ねていく洗濯物の山を眺めるだけで飽きなかった。時の流れが尻の穏やかさであるキーウエストの風土を作っているのは、白人でなくこうしたコンクなのだろうとルイは思う。

束ねた白髪のほつれも気にせず、輪郭を歪曲させる重そうな眼鏡がずり落ちるのも構わず、老婆は淡々と作業を続けている。痩せてはいても曲がっていない背筋が、生涯現役を貫く強い意志を主張しているようだった。

「おまえさんはあたしの六番目の息子に似てるよ」
ブザーの鳴った乾燥機からバスケットへ衣類を移しながら、老婆は不意に言った。背中を向けられていたルイは一瞬、独り言かと思いかけた。

「この金歯はその子が車を売って作ってくれたのさ。親孝行な、いい子だろう」

関節が固まってきちんと伸びそうにない指がイーッと唇を引く張り、奥歯の金を見せびらかす。薄暗い店内だからこそ金は格別に光って見えた。

返答を待たずに老婆は再び背を向けた。とつさのことで反応に困ったルイだったが、返事を期待されないとそれはそれで落ち着かないものがある。

どうしてくれようかと思案するうちに、店の前で白いバンが停ま

った。ボディに赤くペイントされたコインランドリーの店名とドロップオフ・サービスの値段は剥げかけている。

ドロップオフ・サービスとは、依頼された洗濯物を文字通り玄関先に『落として』おくことだ。決して安くはないが、キーウエストの別荘に長期滞在する白人達にとっては、手軽で便利なものらしい。運転席から降りてきた若いアジア人は、老婆が指示する大量の洗濯物を荷台へ運び入れ、また出かけていった。

「あれは八番目の息子だよ」

「……肌の色と年齢がおかしいだろ」

「おまえさんの国じゃ、親子つてのはそんなもんかい。さびしい話だねえ」

今度は話題に食いついてやったが、あっけなく切り返されて不首尾に終わった。悔しがりながらルイはふと、車を手放して金歯を工面してやったという何番目かの息子も、実の息子じゃないのではと疑いだす。

「洗濯を店で待つよそ者なんてのは」

口を開こうとして先手を取られる。

「たいていはワケありなのさ。そうでなけりゃ酒場に行くか、入墨を彫るか、とにかくそのベンチは悩みを背負った男の指定席さ」

ビジネスだと言ってもこの老婆には通用しないだろう。アンティークショップなら、ルイは客の気分も需要も推し量れる。それを忘れて老婆のテリトリーに踏み込んでいた迂闊さを呪いつつも、妙に納得していた。

ガラスのはまっついていない窓は、盗む気のない者にとっては、なんの境界線にもなり得ないのだと。

ルイには見ず知らずの人間と話す趣味はない。個人的な話題ならなおさらだ。

老婆とて聞き出そうとしているわけではなさそうだ。言いたいこ

とだけ言ったら仕事に戻っている。洗濯が終われば乾燥機に移し、乾燥が終われば畳んで山にする。そうした繰り返しは、アンティークショップの店先で商品を磨く祖母の姿を想起させた。

「……うまく行くと思えない。簡単に男を信用して、あいつ絶対いつか痛い目に遭うんだ。それくらいなら俺が泣かせる方がまだ我慢できる。そんなんだよ、俺とあの女は」

聞いているのかいないのか。老婆は相槌さえ打たずに手を動かしながら続けているが、ルイはどっちでも良かった。

「時計と女がセットになつてたら、女と別れた時に時計の針も止まっちゃう。別々にしときたいのにあいつは俺自身より俺の歯車回すのがうまくて、腹が立つんだ。自分の歯車にはろくでもないボストン男を噛ませたくせにさ」

浮いた錆をペンキで塗り込めてきたような無骨な鉄格子を、ルイの拳が軽く殴る。

「ただ、あいつとしてるとさ……サンセット・セレブレーションを思い出すんだよ。どこで見たって夕陽は夕陽なのと一緒にさ、セックスもどの女とだって結局やるコトは同じだよ」

老婆の唇がにやりとしたから、聞こえてはいるようだ。

「だけどフランは俺に言ったんだ。見るべきは夕陽じゃなくて、夕陽に対する敬意と謙虚に満ちた神聖な表情だってね。フランとやってる時、あいつそういう顔したんだ」

「そうさ、それがセレブレーションってもんだろっ」

当たり前のことを馬鹿みたいに言いだす子だね、と呆れているのが一目瞭然だった。行っちゃまいなどでも言いたげに、痩せた腕が大きくぞんざいに振られる。ルイはつい笑った。老婆の作業を一瞬でも中断させたのが、何故か無性に嬉しかった。

「次にその娘と寝る時に、瞳を覗いてごらんよ。その娘と同じ顔した男がいるだろっさ」

乗り合いを嫌う自分、見知らぬ他人との会話を疎ましく思う自分。それがいつの間にもやら生まれも育ちも肌の色も違う老婆の関心を引いて、小さな満足を得ている。

あいつのせいだ、とルイは苦笑した。

好きなものを好きと胸張る生き方は、自分を保つために隔壁が要るルイの調子を狂わせる。侵食され個を問われている気分になる。壁の内側にいるフランと不似合いな男を、両親の遺志を達成した後、の空洞を埋めるのに足掻く姿を、これ以上覗かれたくはなかった。

だがあの瞳に映っているのはそう悪くない男なのかもしれない。

ボロいピクアップトラックでUS-1のマイルをカウントアップして見に行きたいのは、彼女の隣で笑っていられる男かもしれない。ルイはマネークリップから十ドル札を抜き、モーターの名と部屋番号を書き付けた。

「悪い、ばあちゃん。用事ができたんで、俺の洗濯物はドロップオフしてくれ」

「ばあちゃんと呼ぶんじゃないよ、おまえは九番目の息子だ。やれやれ、やっと野球ができる人数が揃ったね」

重そうな眼鏡を額に押し上げて額面を睨む老婆には、近いうちにまともな老眼鏡を買ってやる羽目になるだろう。そのためには少々あこぎな副業を再開しなけりゃな、と思うとルイの血は騒ぎだした。「キューバ系の監督だったら戦績は期待すんなよ。スペイン語以上に社会主義と仲良くする気はない」

「馬鹿な子だね、監督はあたしだよ。何しろあたしが洗ってやれるのは、洗濯物だけじゃないんでね。さあ、さつさとお行きよ。女の忠誠心が堅いのは、誓ってる間だけなんだからね」

「誓い返さなきゃ破棄されるモノが忠誠って呼べるんならな。……なるほど、俺はあんたの息子らしい。おかげで口の悪い遺伝子が暴れ始めた」

やり込められっ放しだった皮肉屋は、優秀な生徒のご機嫌伺いに、照りつける太陽の下へ踏み出した。

大きく見開かれたフランの瞳から注がれる視線は、ルイの顔、傷だらけの腕、そして再びルイの顔へと巡回して戻ってきた。もう一周しそうな視線から逃れるため、ルイは宝飾時計専門店のガラス扉からデュバル・ストリートを眺めやる。

「小切手にカレー代を足すの忘れてたからな、ランチをおごればいいんだろ？ マグノリアカフェのサワードウ・サンドイッチだったか」

「……もう一枚、小切手を切れれば済むのに？」

「現金主義なら、ここで決済しましょうか？」

戸惑いに怯えていた唇が吹き出した。こらえきれない笑いに肩を震わせながら、フランは呆れたように天を仰ぐ。

「君って本当にひねくれてる。和解を申し込みに来た態度と思えない」

「当たり前だろ。振った女に未練が湧くなんて間抜けもいいところだ。手土産にやっと見つけた六本指の猫は凶暴だし」

ルイは真新しい引っかき傷満載の腕をさすった。

「そうなの？」

「あんまり暴れるから逃がしちまった」

「猫じゃなくて、振った女に、の続きを議題にしたいんだけど。照れ隠しで論点ずらすの、素直じゃないけど可愛い癖ね。……それで、『フラグラーの愚行』並みの非現実的オファーにハリケーンを起こしてみたご感想は？」

俺たちにはオブジェさえ残らない。そう言い捨てた皮肉屋は、かわられて心外だとばかりに眉を上げてみせる。

「おかげで、ろくでもないビーチで我慢してたコンクはバヒア・ホンダを手に入れたんだろ」

「六本指の猫に口を引っかかれちゃえば良かったのに」

「まあ、せつかく口が無事なんで言つとくと……気付いたんだよ。鉄橋が落ちても、俺は既に本土じゃなくてキーウエスト側にいる。あんたのいる方にね。会った時点でもう戻れない地点に連れてかれてた」

両親という名の橋桁が落ちた鉄橋で、ルイはずっと立ち止まっていた。その先へ進むにはUS-1の景色よりトラックより、助手席の住人がなければ始まりようがなかったことをようやく認める。

「フランのいるバヒア・ホンダの景色に、俺も混じってみたくなた」

待ちわびた祝福の瞳がゆっくり微笑む。

たった数ドルで寡占出来るブルーグリーンのビーチのように、この瞳を独占するために心の隔壁を少し下げるのは、怯えていたほどの大作業ではなかった。ルイはメキシコ湾の温かな水が静かに流れ込んでくるを感じる。

「なら、条件があるの。……水着を買うこと」

「The deal is done」

「それから、カレー代を決済して。あたし現物主義なの」

白い手が傷だらけの手を引いて、フランが支店長を務める宝飾時計専門店の中央を突っ切らせる。

「サンドイツチは？」

「言つてあるでしょ。支払いはキャッシュじゃなくて労働力で、つて」

支店長室のドアが閉まると、支払いは唇で唇から回収されていく。労働力の意味を悟つて、ルイは大仰な嘆息を試みせた。

「俺のセックスはサンドイツチ並みの安さなのか？」

愚痴りながらも素直に迅速に支払いは進められ、衣服は紙幣が撒かれるように次々と床へ落とされた。

「君はあのサワードウが絶品だつて知らないから、そんなこと言え

るの。……あとで消毒しなくちゃね、アンティーク部門の責任者が傷だらけじゃ、店の信用に関わるわ」

「のんびり暮らせればいいとか譲歩しといて、やっぱりあなたの下で働かす気なんだな」

「だって君、下にいるクセに冷静に見下すの大好きでしょ。……ね、こんな、ふうに」

契約書など不要だった。ルイは自分のインクでフランの一番奥にサインをする。冷静と程遠い熱気の中にいるのに不思議と凪いだ境地が居心地良くて、つい呟く。

「俺にはあんたがいらいらいんだ、フラン」

「あたしもそう思う」

I can't agree with you anymore. これ以上賛成できないくらい賛成。その通りだと真面目に頷かれるのが皮肉屋には一番つまらない反応だ、とみずから宣言したはずだった。

なのにフランの返事にいたく満足している自分に気付いて、ルイは苦笑した。

「あたし、夢が一つ増えたの」

「アンガスビーフを見捨ててマクドナルドを誘致するなら、いい経営判断だ」

「違っつたら、もう。……君に、あんたを愛してるって言わせること」

なんて楽天家なんだ、とルイは呆れてため息を吹き上げる。

「そいつは結構、手間のかかる夢だと思っぜ」

「可能性は否定しないのね」

「まあ、車で海を渡って密入国するよりは。ところで五万ドルの小切手、返してもらわないとな。労働力で払うことになったんだから」
出した手をぴしゃっと叩かれた。

「ビーチやベッドで君にビジネスの話させない、って夢も追加しないといけないみたいね」

「あいにく職場でソファだけど、ここ」

「密入国の話を信じるまで返さないから」

「じゃあ、コーラでシャワー浴びるよりは……なんて言ったら、今からグロースリーのコーラを買い占めに行きそうだな」

君のピックアップトラックを貸してね、たくさん積めるから

そう笑うフランにルイは、タイヤの空気圧を上げておくと請け合っ
た。

．．．It's The Second Beginning

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1357v/>

Mile Zero

2011年7月25日01時51分発行